



日本統計学会 会報 2016.10.30 No. 169

発行—— 一般社団法人 日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
公益財団法人 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-3234-7738
編集責任——中野 純司（理事長）／間野 修平（庶務理事）
森 裕一（広報理事）／久保田 貴文（広報委員）
西埜 晴久（広報委員）
振替口座—00110-3-743886
銀行口座—みずほ銀行九段支店普通 1466879番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆…………… 大瀧 慈… 1
2. 統計学会各賞受賞者のことば
 - 2.1 第20回日本統計学会賞受賞のことば…………… 鎌倉稔成… 3
…………… 栗木 哲… 4
…………… 田栗正章… 5
 - 2.2 第12回日本統計学会統計活動賞受賞のことば…………… 鈴木督久… 7
 - 2.3 第12回日本統計学会統計教育賞受賞のことば…………… 石井裕基… 8
…………… 青山和裕… 10
 - 2.4 第10回日本統計学会研究業績賞受賞のことば…………… 金森敬文・藤澤洋徳… 10
…………… 村上秀俊… 12
 - 2.5 第9回日本統計学会出版賞受賞のことば…………… 柳川 堯・株式会社近代科学社… 13
 - 2.6 第30回日本統計学会小川研究奨励賞受賞のことば…………… 廣瀬善大… 14
3. 2016年度統計関連学会連合大会の報告
 - 3.1 大会概要報告 …… 桜井裕仁… 15
 - 3.2 チュートリアルセッション・市民講演会報告…………… 林 篤裕… 15
 - 3.3 企画セッション報告 …… 川端一光・林 篤裕… 16
 - 3.4 文部科学省数学協働プログラム・ワークショップ報告 …… 星野伸明… 18
- 3.5 コンペティションセッション報告…………… 谷崎久志… 18
- 3.6 コンペティションセッション受賞者の言葉
 - 最優秀報告賞…………… 渋谷遼平… 19
 - 優秀報告賞…………… 今泉允聡… 19
…………… 高島哲也… 19
…………… 富田裕章… 20
…………… 中山優吾… 20
4. 第11回日本統計学会春季集会のお知らせ（第一報）…………… 中野純司, 青木 敏, 田中研太郎,
二宮嘉行, 土谷 隆… 21
5. 特集記事
シリーズ「統計学の現状と今後」…… 谷口正信… 21
6. 統計検定 RSS/JSS 試験 最優秀成績賞の授与に
ついて…………… 岩崎 学… 23
7. RSS/JSS 試験（2016年5月実施）合格者…………… 中野純司… 23
8. 2016年6月統計検定の成績優秀者… 中野純司… 24
9. 統計検定合格者の声…………… 岩崎 学… 25
10. 理事会・委員会報告（2016年7月16日開催）… 29
11. 2016年役員・代議員協議会記録…………… 間野修平・村上秀俊… 30
12. 修士論文・博士論文の紹介…………… 31
13. 新刊紹介…………… 31
14. 学会事務局から…………… 31
15. 投稿のお願い…………… 32

1. 巻頭随筆：核実験と不老薬とドーピング

大瀧 慈（広島大学名誉教授）

広島カープ25年ぶりのリーグ優勝で感極まるファンの姿とともに物騒なニュースがTVに流れていた。北朝鮮が立て続けにミサイル発射実験と核

実験を行ったという内容である。この状況に対して今のところ国連をはじめ、日本、米韓そして中露ともに、何れの国も経済制裁以外の有効な対抗

手段を持ち合わせていないとのこと、誠に心許ないことになっている。今や夜が明けて目が覚めてみたら周りは焼け野が原、いや、自分自身の存在すら分からない日がそう遠くないうちにやって来るかもしれないのだ。なんとかそのような事態にならないようにせねばならない。直接的には外交や防衛関係の専門家に対処してもらわなければならないと思うが、刻々と日々変化する情勢を客観的にかつ冷静に解析し、最良の対処法を探索することが基礎となるはずである、その観点から統計学は重要な役割を担えるのではと思っている。

一年程前のことだったが、NHK スペシャルで夢のような“薬”が開発されつつあることについて、かなり詳しく紹介されていた。それによると、NMN という名前の薬がサーチュイン遺伝子の発現を促すことで不老長寿を実現できるかもしれないというものだ。マウスの実験では、ただ単に老化を止めるだけで無く、人間で60歳相当の個体にこの“薬”を投与する（餌に混ぜて食べさせる）ことで、20歳相当にまで若返りをさせることができたというのだ。また、糖尿病モデルの個体に投与したら治癒したとも。インターネットで開示されている情報では、その“薬”は既に大量生産の目処は着いており、数年内に市販許可を得ることを目指して臨床治験の準備中とのことである。また、医薬品として販売の認可を受ける前に、健康維持のためのサプリメントとか犬や猫などのペットの寿命伸ばすために餌に添加物として混ぜて販売することも考えられているそうだ。この春に定年退職し、年金をいただく年齢になったこの身にとって、個人的にはとても魅力的な“薬”であるが、「そのうちとりあえずペット食品でも嚙ってみようかな」などという不埒な考えも浮かんでくる。しかし、よく考えてみると、これは近い将来における人類滅亡の第一歩になるのではないかと不安にもなる。もし、NMN が医薬品として認可され市販されたら、多くの老人達がこれを買って求めるであろう。その結果、ほぼ全ての生活習慣病の罹患が大きく抑制され、暦年齢は100歳以上であるが生物学的年齢は20歳という高齢者達がス

マホを持って街を闊歩するようなことになるかもしれない。まあ、そのような状況になる前に、食糧問題やエネルギー問題が深刻化して戦争やテロ、殺人が頻発するようになってしまうだろうが……。最悪の事態は避けられたとしても子供を産むことは基本的には禁止され、循環型の社会システムは根本的に破壊されるに違いない。「そんな危険な“薬”は製造も販売も禁止すればよいのではないか」という意見が当然出てくるであろう。しかし、問題はそんなに簡単に解決できるものではなさそうである。一寸考えてみれば、現在、進められている再生医療や創薬は、見かけは多少の違いはあるかもしれないが本質的にはNMN と同じ方向で開発が進められている。NMN だけを叩いたところで、第二第三のNMN と同様な“薬”や“治療法”が次々と世の中に出てくるに違いない。法律でそのようなものを使えなくしたところで、密売などを通じて地下経済に組み込まれれば、シャンシャンである。飲めば健康に良い麻薬として。

似たような話は他にもある。リオ・オリンピック／パラリンピックでは、シャラポアらロシアの数多くのアスリート達が過去のドーピング検査で陽性反応が出たということで出場停止にされてしまった。一方、検査で検出出来ない“ドーピング”は問題にされていない（というか問題にできない）。実際、マラソン選手の多くが重要なレースの前にロッキー山地などの高地に行って低酸素状態でも効率的に運動できる体質になるようにトレーニングをしている。また、シンクロナイズ水泳選手は、何年もかけて水中で長時間息を止めてプレーをし続けるという過酷な練習を繰り返して、脾臓の血液タンクとしての容量を増大させ、息継ぎをしないで高度な演技ができる体作りをしているとのこと、これらの場合は明らかにドーピングとは言えないが、健康を害する危険度を高めているという観点からは大きな違いはないようにも思える。何れにしてもドーピングか否かの境は分かりにくい。

最近の日本での実態として、21人の新生児に1人の割合で、体外受精児が生まれているという。

そして、受精卵を対象とした出生前検査が少なからず行われ、遺伝的に問題の無い卵が選別されているらしい。個々の現場の状況を考えると、合理的な対処のようにも思えるが、ある国では、さらに踏み込んで受精卵に対して遺伝子工学的な操作が行われ、細胞特性の改変まで始められているとの噂もある。遺伝子操作で見た目は椎茸だが味や食感は松茸とか美味しいマグロのような鯖が食べられるようになる位であれば、歓迎もするが、人間の容姿や能力にまでコントロールされ始める

としたら、いろいろと厄介な問題が出てきそうである。倫理的観点からのブレーキは必須に違いない。ここは、未来をより正確に予測するために有用な学問である統計学の出番かもしれない。統計学の研究者には、それぞれの分野で、今こんな事をしていたらこんな未来が来るということを、世の中の多くの人々に知ってもらい、間違った選択の回避のための材料の提供を求められているのではなかろうか。スマートな解は出せないかもしれないが……。

2. 日本統計学会各賞の受賞のことは

2016年9月6日、統計関連学会連合大会において、日本統計学会各賞の表彰式がありました。ここに、受賞者のみなさまから、受賞のことはいただきましたので、以下の順にご紹介させていただきます（略歴・受賞理由などは、前号をご覧ください）。

- ・第21回日本統計学会賞：鎌倉稔成氏、栗木哲氏、田栗正章氏
- ・第12回日本統計学会統計活動賞：鈴木督久氏
- ・第12回日本統計学会統計教育賞：石井裕基氏、センサス@スクールプロジェクトによる統計教育の普及促進（主査：青山和裕氏）
- ・第10回日本統計学会研究業績賞：金森敬文氏・藤澤洋徳氏（共同受賞）、村上秀俊氏
- ・第9回日本統計学会出版賞：柳川堯氏・近代科学社（共同受賞）
- ・第30回日本統計学会小川研究奨励賞：廣瀬善大氏

2.1 第21回日本統計学会賞受賞

受賞のことは

鎌倉 稔成（中央大学）

日本統計学会賞受賞の知らせは、まったく寝耳に水の知らせでした。一昨年まで学会の理事長を仰せつかり、任を解かれたばかりとはいえ、まだ、役員の任期中でもあったので、お手盛りといわれ



日本統計学会各賞等受賞者と岩崎会長、中野理事長

ないよう、きちんと受賞者講演を行わなければならないということで頭がいっぱいになりました。返上できますかというような会話を現理事長と交わしたことも覚えています。しかし、公平な立場で審査も済んでいますので、ぜひとも受賞してくださいとのことでした。やっと、気持ちが落ち着いたところですよ。推薦者の方々、統計学会の関係者には、名誉ある賞をいただき、改めて感謝申し上げます。

私と統計学との出会いは、中学生の頃の長野県統計グラフコンクールへの応募です。「統計グラフ全国コンクール」（主催：公益財団法人統計情報研究開発センター）の第14回か第15回の頃だったと記憶しています。このときは県で3位に入賞しましたが、総務省に送られたかどうかは聞いて

いません。理事長時に、日本統計学会の職務として同コンクールを審査員をすることになった折には、ここまで統計に関わることになったこと、ほぼ半世紀を超えて、またグラフコンクールにコミットしたこと等を考え、不思議な気持ちになりました。

私は、大学では経営工学を専攻し、統計学、信頼性工学、OR、経済学等を勉強しましたが、もちろんその中で興味を持ったものは、統計学であったわけです。経営工学は、機械系分野7割、科学工学系分野3割ぐらいの割合で学生が進学していましたので、通年の授業である統計学概論は、機械系の吉本勇先生が機械の歯車の溝の深さのデータについての統計解析を例題として扱われ、このような分野にも確率統計が必要であることを実感しました。機械の歯車が滑らかに回るためには、部品の精度管理が重要であること、また、歯車にはバックラッシと呼ばれる隙間が必要であり、その確率論的振る舞いの研究も精度管理に重要であることがわかりました。

4年次、大学院と信頼性工学を専門とする真壁肇先生の研究室で信頼性工学における統計的方法に関して研究しました。統計学は具体的な分析対象を持つという意味において、信頼性工学、幅広く捉えれば品質管理といってもいいでしょう。工学部における統計学は品質管理の分野を中心として発展してきたといえます。

そして、統計数理研究所に職を得てからは、信頼性工学に寿命分布推定の研究の継続性を踏まえて、生存時間分析 (Survival Analysis) の研究を行いました。当時は、南麻布に統計数理研究所があり、近隣の有栖川公園でよく頭のリフレッシュをしたものです。柳本先生とCoxモデルの推定量の性質を調べ、その成果をBiometrikaに掲載していただいたときは、本当にうれしく思いました。その後、OaksがBiometrika Century: Survival analysisにこの論文を紹介してくれました。

受賞者講演では、生存時間データの分析では重要な小標本の分析で、重要な役割を果たすセンサーデータから、最近研究しているセンシングの

データであるセンサーデータと研究の流れを紹介しました。センサーとセンサードではさきさか言葉遊びの感がありますので、タイトルにはビッグデータを入れました。統計家の立場として、気になっていることは、昨今政府系の研究費は、IoT、AI、セキュリティという分野に重点投資しているように見えます。AIがあまりにも大きな比重を持ちすぎています。AIのエンジンとして統計学の理論体系も組み込まれているはずですが、どこにも統計学の名前が出てこないのはどうしてでしょうか。我々統計家も理論と同時に、統計学が産業応用に役立つことを身をもって示していくことが必要だと思います。

さて、私の最近の話題としては、日本統計学会の理事長として、ロシア統計学会の設立に立ち会い、祝辞を述べたことがあります。2014年、ウクライナ問題もあり、英国、米国の代表者もなく(さすがに、英国からはお祝いの手紙、米国からはロシア語のビデオレターがありましたが)、寂しいものでした。かつて日本の統計学会がそうであったように、官庁統計と経済統計からロシア統計学会も成立しました。学会の設立もさることながら、ロシア統計学会は統計学の発展には統計教育が重要であることを設立の当初から意識し、これを重要な達成目標としています。それに対し、やっと統計検定の始まった日本です。負けてはいられないと強く感じました。

最後になりましたが、日本統計学会のますますの発展(AIに負けることなく)を祈願して、お礼のことばといたしたいと思います。

受賞のことば

栗木 哲 (統計数理研究所)

この度は思いもかけず日本統計学会賞の受賞の栄に浴し、たいへん嬉しく思うとともに一方で身の引き締まる気持ちです。推薦してくださった方々、審査員関係者の先生方、日頃の共同研究の仲間の方々、統計数理研究所の同僚や東大時代の先輩・後輩、日本統計学会の皆様には厚くお礼を申し上げます。特に、私をすくい上げて統計学研究

者の道に導いてくださった広津千尋先生、共同研究などを通して今も指導をいただく竹村彰通先生には、心より深くお礼を申し上げます。

受賞理由であるチューブ法・オイラー標数法は、確率場の最大値の分布を近似するための方法です。本質的に積分幾何学を用いますが、いろいろな等価な表現があります。一つは H. Weyl のチューブ公式をラプラス変換する方法で、チューブ法 (volume-of-tube method) の名前はこれに由来します。もう一つは、エクスカージョン集合 (確率場の値がある閾値以上となるような添字集合) のオイラー標数の期待値をモースの定理を用いて計算する方法で、オイラー標数法 (expected Euler characteristic heuristic) とよばれます。私が、竹村先生との共同研究で行った研究の出発点は、ガウス確率ベクトルの非凸な錐への直交射影の長さの分布というものでした。これは、凸錐への射影の分布を扱う「順序制約推論」の一つの拡張で、上述の方法と等価な問題を記述することができます。

統計学への応用としては、私自身は多変量解析や非正則モデル (特異モデル) の検定の分布論に興味がありました。他の有名な応用例としては、故 K. Worsley 先生が開拓した脳画像データ解析があります。例えば VBM データ解析の標準ソフトウェア SPM では、エクスカージョン集合 (反応が高い領域) の有無、その面積、その個数に関する p 値が出力されます。またオイラー標数法は、素粒子実験の分野でも使われています。未知の素粒子の質量は事前には分からないため、実験者は実験の解釈にあたって常に検定の多重性に注意し p 値補正を行っているそうです。このような検定の多重性は LEE (look elsewhere effect; どこでも効果) とよばれています。(先週偶然に、情報・システム研究機構の合宿で KEK の研究者の方と LEE について話す機会があり、その方の統計学の知識に驚いたところです。)

以上、主たる受賞理由のチューブ法・オイラー標数法について簡単に述べました。もうひとつ受賞理由で言及されていた統計数理研の英文誌

(AISM) に関しても簡単に触れたいと思います。現在中国人の統計研究者は国境を越え、汎華統計協会 (ICSA) の下で研究集会を行い、また Statistica Sinica などの有力誌を運営しています。そのような背景もあり、以前自分が編集長を務めていたときに AISM を「統計関連学会連合」の公式誌として位置づけていただくのはどうか、という提案をさせていただきました。私の案は準備不足でしたが、岩崎現会長が提案されている日本の統計コミュニティを代表する新しい学術雑誌を創刊するというアイデアは是非実現されることを願っています。

話を研究の話に戻します。研究の過程ではいろいろな個人レベルの出会いや偶然によって研究の進展がありました。ここには書けませんでした。それらの多くは楽しい思い出で、本当に多くの方にお世話になりました。最近では年齢相応に管理職業務も増えていますが、多少無理をしてでも出張と研究者招聘を通して共同研究のきっかけをつくるように心がけています。共同研究は、とくに分野が離れるとギャップを埋めるための時間もかかりますが、新しい知識や分野を勉強するきっかけとなり非常に楽しく感じています。以上まとまりのない文章になりましたが、これからも自分の立場を通して、微力ですが統計学研究と統計学界に何らかの寄与ができればと願っています。この度はありがとうございました。

受賞のことば

田栗 正章 (千葉大学名誉教授)

この度、日本統計学会賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に思っています。もちろん、今回の受賞は私一人の力ではなく、これまで様々な形でお世話になった方々のご協力の賜であり、心より感謝しています。ここに、関係するすべての方々に、厚く御礼申し上げます。

私は、大学院時代までは統計学の専攻ではなく、1970年に千葉大学に奉職してから統計の研究を始めました。就職の際の条件が、「標本調査の研究を行うこと」だったので、まず最初に W.G.

Cochran 著 “Sampling Techniques” によるセミナーで勉強しましたが、その中に最適層別の問題が紹介されていました。大学院時代に、多少コンピュータに馴染んでいたこともあり、当時、統計の世界ではほとんど使われていなかった非線形最適化法を適用して、最適層別点を計算してみようと考えました。それがきっかけとなり、その後の研究においては、最適化が一つの重要なテーマであると考えられるようになりました。しかし、現実問題への適用に際しては、最適値からのズレの影響（頑健性/安定性）を、同時に評価しておくことも重要であると考えました。

その後、標本調査分野、大気環境分野、臓器移植分野、大学入試分野等におけるデータ解析にも従事するようになりました。これらは、いずれも、現実に関心があった問題についての研究でしたが、それらに最適化と安定性の観点からの解析を適用しました。私は、応用統計の研究については、「現実に関心された問題を解決することはもちろん重要だが、その解決の途上で見出された方法論を抽象化し、他の同種の問題に対しても適用可能な普遍化が部分的にでもできれば、それは望ましいこと」と考えています。その観点からは、我々が提案・構築した、大気環境における各種の汚染物質濃度の予測方式や、各種の臓器移植における検索方式が、その後のかなりの期間、それらの分野における日本の標準的な方式となっており、ある程度の成果をあげることができたと考えています。

一方、「対象とした問題の中に理論的（数理的）に未知の問題が含まれていれば、それはまた大変興味深いテーマとなる」と考えていますが、上記の問題においては、そこまでの研究を行うことはできませんでした。この種の研究成果には、現実の大学入試の問題を、2次の制約条件付き相関係数最適化問題として定式化し、特異値分解の手法を用いて解決した論文があります。このように、応用統計の研究については、多少の貢献ができたのではないかと考えていますが、上の例に見るように、現実に関心する問題は、必ずしも理論的

に優れた結果から生まれるとは限らないことを痛感しました。

これとは別に、応用統計学と数理統計学のあるべき関係や、統計学と数学/応用数学との本質的な違いについて、長い間答えが見つけれないまま悩み考え続けてきました。この転機になったのは、1993年に C.R.Rao 教授の書かれた “Statistics and Truth: Putting Chance to Work” の翻訳に携わった幸運でした。この著作によって、やっと統計学の本質の一端が理解できたように思えました。所属が理学部数学教室だったこともあり、ともすれば数理統計学の分野を過度に評価しがちであったことに気づき、以降の私の教育・研究に大きな影響がありました。

ただ、悶々と考え続けていた間でも数理統計学の勉強を続けてきたことは、私にとっての財産になったこともまた事実です。すなわち、例え応用統計的な研究を行う場合でも、程度の差こそあれ、数理統計学の基礎知識を持つておくのは必須であること、そしてそれはいつ始めても遅くないこと、初めは理解できなくても繰り返し学ぶことが大切であること等を、身をもって体験できたからです。ともすれば、問題の本質を見極めようとすることなく、早見えしたような見解に引きずられがちですが、このような研究態度は、厳に慎むべきであることも学びました。

今回の受賞に際しては、統計教育の面についての貢献も評価していただいたようです。1990年代後半からは大学等の管理運営の業務が忙しくなり、統計学の研究を行う余裕がなくなっていました。定年になり、多少自由な時間が持てるようになった時には、昔のように積極的に研究を行おうという気概が薄れていました。しかし、残された時間を、これまでお世話になってきた統計の世界に、何らかの形で恩返ししたいと思っていました。たまたま、学校教育、社会人教育の各段階における統計教育の重要性がクローズアップされつつあった時期でもあり、少しずつ様々なレベルにおける統計教育に関わるお手伝いをしてきました。

統計教育の問題は、今後ますます重要になって

くと考えています。初等・中等教育における学習指導要領や教科書の問題、高大接続で重要な大学（共通）入試の問題、高等教育における参照基準やカリキュラムの問題、社会に対する統計リテラシー教育や統計検定を含めた統計の普及の問題等々、我々が尽力すべき課題が山積しています。中でも大きな問題の一つに、高等教育機関におけるデータサイエンスに関わる組織の設置があります。日本統計学会や統計関連学会連合等を中心に、今後一層の努力が必要だと考えています。

微力ではありますが、今回の受賞に恥じないよう、できるだけのお手伝いをしたいと考えています。今後とも、よろしくご協力下さいますようお願いいたします。

2.2 第12回日本統計学会統計活動賞 受賞のことは

鈴木 督久（日経リサーチ）

統計活動賞を頂きまして、感謝と恐縮が混在しております。私のやってきた仕事は組織の中での成果であることはいうまでもありません。一緒に歩んだ仲間と、仕事をさせてくれた組織に、そして推薦して下さいた先生方に深く感謝する次第です。

これまでの仕事を振り返りますと、その時に必要になったことをやってきた印象です。調査機関に就職し、調査・統計学が必要になりましたが、学生時代は統計学と無縁な中国文学科でした。学校で統計学を勉強したことはないのに、必要に迫られ、大きな本屋に行き先生方の著作を買って読みました。

調査機関の仕事は、通常は公表されることはありませんが、新聞紙面に公表される企業評価や世論調査・選挙予測など人々の目に触れる仕事もあり、それらを通じて先生方との交流も始まりました。そして現在まで、ここにお名前をあげられない先生方すべてに、お世話になり続けています。

統計学関連の諸学会に入会した動機は、選挙予測のためでした。1990年に人事異動で政治部記者を2年経験したあと、選挙予測システムの構築を

始めました。朝日新聞社の選挙調査データを分析した林・高倉（1964）を参考にしました。当時は未知のことが多く、本人に聞こうと思ひ学会に出かけ、林知己夫先生のそばへ行き「選挙予測をやるつもりです」と挨拶すると、「続けることが大切です」と一言だけ頂きました。

衆院に小選挙区比例代表並立制が導入された1996年の総選挙から予測システムを稼働させました。過去のデータがないのは他社も同じで「今がチャンスだ」と思いました。「続けることが大切」の意味は、予測分析をして、すぐに実感できました。予測モデルにとって、データは「継続的に同じ」方法で収集されていることが重要で、変化するのは有権者の回答結果だけ、という状態にしておくという意味です。この夏の参院選でも予測モデルは的中結果を出しました。しかし、未知の未来の選挙結果を、明日の紙面に出すその夜は、今でも緊張でドキドキします。

選挙予測ではbootstrapを使っている部分がありますが、bootstrapを知ったのは、会社の先輩がクライアントから与えられた課題を解決するために統計学の本を読んだが、どれにも公式が書いてないため、統計数理研究所に質問を出したら「式はすぐには導出できないけれどbootstrapが使える」という回答をもらったことでした。社内では「これは便利な方法だ」となりました。余談ですが、私はEfronがなぜbootstrapと命名したか、というアサッテの方向に関心を持ちました。全国の候補者個人の当選確率と政党別獲得議席数の予測区間を、同時に推定するのにbootstrapが役に立っています。

1990年にバブル経済が崩壊し、新しい企業評価モデルを開発することになり、多変量解析を使って1994年2月の一面で発表すると、大きな反響がありました。ここで豊田秀樹先生や狩野裕先生と知り合うことになります。豊田先生はSEMの多母集団モデルによる改良を提案され、さっそく採用しました。私がSEMを勉強するきっかけになりました。

また日本科学技術連盟での企業評価モデルの講

演も大きなきっかけでした。当時、奥野忠一、吉澤正、芳賀敏郎の各先生が多変量解析研究会を主導していて、出入りするようになりました。企業人が業務課題とそのデータを持ち寄り、統計学者が解決策を支援するのです。芳賀先生のデータ解析はEDAの体現だったと思います。見事なデータ解析の裏にある秘密、無形の教えを無償で頂戴したと思います。吉澤先生は私が大学で講師をやるきっかけを作って下さりました。20年間ほど筑波大学、早稲田大学、東京大学などで学生を教えて、こちらも勉強になりました。また、椿広計先生にはこの時期以降、あらゆる場面でお世話になり、ご指導をいただくことになりました。

最近では統計検定の創設をお手伝いしました。専門統計調査士を担当したのですが、これは諸先生の見識に導かれたものです。難しい事業だと思いますが、発展・定着させることが重要です。公的統計の民間委託などの背景もあり、美添泰人先生、舟岡史雄先生、廣松毅先生らとの出会いがありました。

最後に、統計学と文学論。「データ＝構造＋誤差」という分解は、データ解析をしていると常に反復しますが、文学論も同源だと思い至りました。漱石は「文学＝F＋f」、吉本隆明は「文学＝指示表出＋自己表出」と抽象化・一般化しました。構造と差異の分離の発想が、芸術言語の伝達と感受の分離と同型であり、商品の「使用価値＋交換価値」の分離とも、本質的に同じ伝統的な西欧思想に依拠しているのです。

2.3 第12回日本統計学会統計教育賞受賞のこぼ

石井 裕基（香川県立観音寺第一高等学校）

このたびは、名誉ある「第12回日本統計学会統計教育賞」を頂き、誠にありがとうございます。また、これまでたくさんの生徒並びに先生方にお世話になりましたことをこの場をお借りして心より御礼を申し上げます。

私自身のことを振り返りますと、高校時代、大学時代と、統計についてはほとんど学ぶ機会がな

く、全くの素人といっても過言ではありません。2012年度の学習指導要領（数学と理科）改定で、数学Ⅰの中に「データの分析」という統計の内容が入ってきたことは、私にとって衝撃的なことで、当時は「教えることができないのではないか。何とか簡単に済ませられないだろうか」と思っていました。そんな私の人生を変える出会いがありました。2012年1月29日、大阪大学中之島センターで「高校数学・新課程研究会2012冬」があり、その会で、慶應義塾大学の渡辺美智子先生と大阪大学の狩野裕先生の講演を拝聴し、「統計はいろいろなところで使われており、文系理系に関係なく重要である」ということを痛切に感じました。渡辺先生がよく「統計は、人を動かすことができる」とお話しされますが、ならば、「統計数値に安易に動かされないような大人を育てたい。そのためには、高校においてしっかりと統計を教えないければならない。それがこの国の未来を支える生徒達には必要なことである。」と思った次第です。

さて、本校は2011年度からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けています。SSHの取組の中に「課題研究」があります。当初は、多くの他の学校と同じ様に、数学の専門的な内容に関わる研究テーマを生徒に考えさせ、取組ませてきました。しかし、統計の重要性を知って以来、統計を使つての課題研究ができないだろうか、生徒が興味を持ちそうなものは何かないだろうかと探していました。そこで、出会ったのが、実践女子大学の竹内光悦先生が中心として実施されている「スポーツデータ解析コンペティション」です。サッカー人気とも相まって、数学の課題研究に集まってきた生徒の中には、サッカーを好きな生徒もいました。そこで、「本物のJリーグのデータを使って課題研究をやってみないか」と生徒に問いかけましたところ、生徒達も乗り気になり、2014年度から「中等教育部門」に参加することになりました。ただ、統計的な分析手法と言っても、十分なことは知りません。そこで、数学Ⅰの「データの分析」のみを使ってどこまで分析ができるのか、ということもテーマの一つとし

て生徒達に取組ませました。一方で、数学の教員の中には統計を教えることを苦手になっている先生がたくさんいらっしゃると思いますが、もし数学Ⅰの内容で詳しい分析ができることを知れば、先生方の中には自分もやってみようと思われる先生方もいらっしゃるのではないだろうか、という気持ちもありました。2014年度の研究は、「統計 de サッカー ～勝利に必要なものとは～」というタイトルでした。生徒たちにとっては、緊張しながらも統計を専門とする先生方の前で発表する機会を頂き、発表後も宮崎大学の藤井良宜先生はじめ多くの先生方からアドバイスを頂きました。また、田村義保先生のお心遣いにより統計数理研究所の中の施設見学もさせていただきました。生徒達には貴重な経験と学びの場となりました。そして、奨励賞を頂きました。その後、その研究は2015年度の「スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会」(全国大会)に「統計 de サッカー ～J1 VS M1～」というタイトルでポスター発表に参加し、生徒投票賞を頂きました。先輩の活躍を目の当たりにした生徒の中には、自分もやってみようと思う生徒も出てき、2015年度も「スポーツデータ解析コンペティション」に、「統計 de サッカーⅡ」というタイトルで参加しました。今回は、数学Ⅰの「データの分析」で習う分析手法に加え、重回帰分析も試みることで、PPDAC サイクルを3回以上回すこと、分析ソフトとして「統計フリーソフト R」も使ってみることにしました。重回帰分析の方法を学ぶために、gacco の「統計学Ⅱ」の講座を見せました。そして、最優秀賞を頂くことになり、地元の新聞でも大きく取り上げられ、生徒達も達成感を味わうことができました。今年(2016年度)は、生徒の希望により数学班すべてが、「スポーツデータ解析コンペティション」に参加することになりました。2つの班に分かれ、サッカーに加え野球のデータ分析にも取組もうとしています。高校生にこのような機会と目標を与えてくださった竹内先生、貴重なデータを提供し

ていただいているデータスタジアム株式会社の皆様、関係者の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

課題研究以外の取組としては、本校の数学科全体で、2015年度から1年生の夏休みの数学Ⅰの課題学習として「統計グラフコンクール」の作品を作成させています。2015年度は賞を頂けませんが、2016年度は2作品が佳作に選ばれました。2017年度は入選作品を出すことを目標に、数学科全体で取組むことにしています。また、統計検定の受検も全生徒に呼びかけ、推奨しています。しかし、統計検定の受検者数はまだまだ少なく、今後の課題と考えています。

先日、近隣の SGH 校から、「PPDAC サイクルについて講義をして頂ける大学の先生を紹介してもらえないだろうか」という問い合わせがありました。2016年8月のマスフェスタ(数学の全国課題研究発表会)でも、データ分析を中心とした課題研究が少しずつ出てきているように感じました。高校でも少しずつ統計的思考力の大切さに気付いた教員が増えているように感じます。今回、私は、金沢大学で開催された統計関連学会連合大会に参加させて頂き、たくさんの先生方や企業の方と交流する機会を得ることができました。分科会に参加することで、最新の研究内容や統計教育の動きを知ることができました。大学と高校の教員が一堂に会して話し合う機会、交流の場を設けることで、統計教育の重要性を認識する教員が更に増えていくのではないのでしょうか。

最後になりましたが、これまで多くの先生方や生徒、そして同僚に出会い、学び、支えられて、今回の受賞に至りました。改めて、皆様に心より御礼を申し上げます。そして、これからも今回の受賞に恥じないように、統計教育の広がり、発展に微力ながら尽くしたいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

受賞のことは

センサス@スクールプロジェクトによる統計教育の普及促進（青山和裕）

このたびは日本統計学会統計教育賞を授与していただき、誠にありがとうございます。受賞の対象となった「センサス@スクールプロジェクト」は日本統計学会統計教育委員会の部会活動として運営されている小中高等学校向けの統計学習サイトで、文部科学省と総務省の後援もいただいております。部会メンバーの先生方を始め、本プロジェクトにご協力いただいた皆様にまずは感謝申し上げます。

センサス@スクールはイギリスで始められたプロジェクトです。サイトに開設してあるアンケート調査のページを通じて子ども達のデータを集め、集めたデータを学習用の素材として提供しています。「センサス」という言葉が示すように、国勢調査の仕組みや大切さを子どもたちに伝えるという趣旨もあって始められたプロジェクトのようです。

質問項目は、個人情報には触れない範囲で、性別や生年月日、住んでいる都道府県や趣味・思考に関するもの、簡単な神経衰弱や反応速度を測るゲームのようなものなどバラエティに富んでいます。イギリスを始め、すでに世界9か国で実施されているプロジェクトなので共通している質問項目なら他の国の子ども達と比較分析することもできます。

このプロジェクトが提供する統計素材としての一番の利点は、子ども達にとって分析しやすい豊富な教材を提供できることにあると思います。算数・数学の教科書では手法を学習しやすいように配慮された架空のデータが使われることが多く、一方で教育ニーズからすると、実在するデータを扱うことで彼らに実感をもたせたり学習を深めることも必要とされます。とはいえ実在する社会的なデータは彼らが分析するには難しすぎるケースが多く、教員にとっても扱いにくく敬遠されがちです。センサスが提供するデータは、彼らと同年代の子ども達のデータであり、また扱われている

データもこういったものであるか容易に把握することができる。その点で興味を持たせやすく、かつ多様な内容や国や地域、年代の違いなどで分析のテーマも設定しやすくできています。簡単なテーマ例では、「年齢や地域によって反射神経に違いはあるか」や「男女で読書冊数に違いはあるか」などが挙げられます。授業で参考になる教材例もサイトでは提供しています。

また、学校現場での統計の授業においては、ソフトウェア利用がなかなか普及していないという現状もあります。そういった状況も踏まえ、教材用のサンプルデータをダウンロードするだけでなく、サイト上でそのままグラフ表示して分析を進められるグラフ描画機能も実装してあります。子ども達は自身の設定した問題に沿ってセンサスのデータを活用し、様々なグラフ表示を使いこなし、結論までをまとめることができるようになっていきます。

まもなく公示される次期学習指導要領においては、統計教育重視の路線が随所に打ち出されるようで、算数・数学科でも一層の指導の充実が求められます。統計に関する授業実践も今後ますます広げられ深められると思います。センサス@スクールはそのような中で大きく貢献できると思いますし、そうできるように我々も努力を続けていきたいと思います。今後ともご指導及びご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2.4 第10回日本統計学会研究業績賞

受賞のことは

金森 敬文（名古屋大学）

藤澤 洋徳（統計数理研究所）

このたびは、栄誉ある日本統計学会研究業績賞を賜りまして、誠に光栄に感じております。推薦して下さった先生方、ならびに日頃お世話になっている多くの先生方には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

受賞対象となった一連の研究では、ダイバージェンスによる統計的推論を扱っています。ダイバージェンスとは、主に確率分布の集合上に定義さ

れた距離（の2乗）のようなもので、推定や検定に用いる損失関数に対応します。重要な例として、最尤推定量に対応するカルバック・ライブラー・ダイバージェンスがあります。

統計的推定ではブレグマン・ダイバージェンスとよばれるクラスが重要です。多くの推定量は、データの経験分布と統計モデルとの間のブレグマン・ダイバージェンスを最小化しているとみなせます。他に、1次元パラメータ（ α , β , γ , η など）で指定されるダイバージェンスが重要な役割を果たすこともあります。

我々の研究の契機となったのは、Fujisawa and Eguchi (2008) の論文です。この論文では、1次元パラメータ γ をもつガンマ・ダイバージェンス（関数形は pseudo-spherical score として Good (1971) が提案）のロバスト推定への応用について考察しています。その結果、ガンマ・ダイバージェンスから導出される推定量は、外れ値の割合が小さくない場合でも、小さな潜在バイアスを達成することが明らかにされました。この点は、それ以前に提案されていたベキ密度ダイバージェンス (Basu, et al., 1998) などにはない、推定にとって好ましい性質です。さらに適当な条件の下で、上記の性質を持つのは本質的にガンマ・ダイバージェンスのみであることが証明されています。一方、Kanamori (2010) では、機械学習の分野で発展しているブースティングに関連して、Fujisawa and Eguchi と類似の数学的議論が展開されていました。

以上のような経緯から、金森と藤澤はダイバージェンスに基づく推論について議論を重ねるようになり、共同研究がスタートしました。まず Kanamori and Fujisawa (2014, Bernoulli) では、推定量に対する条件として、i) 経験推定可能性、ii) データのアフィン変換に対する不変性を仮定しました。これらは、Fujisawa and Eguchi で考察された条件より、統計的推論の観点から解釈しやすいものになっています。その結果、ヘルダー・ダイバージェンスという、関数自由度をもつダイバージェンスのクラスが導出されました。関数解

析におけるヘルダー不等式から非負性が保証されるため、そのように名付けました。上記の2つの条件に加えて、回帰分析で重要な性質である iii) 経験同時分布による条件付き分布の推定可能性（条件付きブレグマン・ダイバージェンスでは自動的に満たされる条件）を仮定すると、ガンマ・ダイバージェンスとベキ密度ダイバージェンスを混合した2次元パラメータをもつダイバージェンスが導出されます。さらにロバストな推定を実現するための条件 iv) 推定量の再下降性 (redescending property) を要請すると、ガンマ・ダイバージェンスのみが得られます。このように、統計的推定の性質に基づいて、さまざまなダイバージェンスの特徴付けを与えました。

続く Kanamori and Fujisawa (2015, Biometrika) では、ダイバージェンスによるロバスト推定について考察しました。とくに、外れ値の割合を推定するという問題を扱っています。多くのダイバージェンスは非負値関数の集合上で定義されるので、関数の定数倍の違いを検出することができます。この性質を、外れ値の割合を推定することに応用できないか、というのが当初のアイデアでした。通常の統計モデルを用いると、外れ値の割合が大きいと推定量の潜在バイアスが大きくなります。これに対して、外れ値の割合もパラメータとして統計モデルに組込むことで、外れ値の割合をベキ密度ダイバージェンスで推定し、モデル・パラメータをガンマ・ダイバージェンスでロバストに推定するという方法が自然に得られます。この導出には、ベキ密度ダイバージェンスの射影的変換がガンマ・ダイバージェンスに一致するという性質が、重要な役割を果たします。回帰分析における位置尺度回帰モデルに対しても、同様の推定法を構成できます。この場合は、外れ値の混入が共変量に対して不均一であっても、外れ値の割合を簡単に推定できます。

ダイバージェンスに関連する研究は数理統計学のみならず、情報理論、機械学習、数理ファイナンスから微分幾何学に至るまで、多方面から進展しています。今後も幅広い分野に対する根本的な

貢献を目指し、楽しく研究を進めていきたいと思っています。ご指導、ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

受賞のことは

村上 秀俊（東京理科大学）

この度は、日本統計学会研究業績賞という大変名誉ある賞を授与して戴きまして、誠に光栄に存じております。推薦をして下さいました先生方、これまで御指導下さいました先生方、平素よりお世話になっている共同研究・先輩・同世代・同僚の先生方に厚く御礼申し上げます。特に中央大学在学時に研究内容から研究態度まで幅広く御指導を賜りました指導教授である杉山高一先生に、この場をお借り致しまして深く感謝申し上げます。

今回の受賞対象となった研究はノンパラメトリック法における検定統計量の不偏性や近似分布に関する研究であります。そもそもノンパラメトリック法に興味を持ち、研究を始めるきっかけとなったのは、私が大学院生の時に杉浦成昭先生に御教授いただいた講義でした。講義の中で、様々な観点からノンパラメトリック法の魅力や重要性を御教授いただき、その面白さを肌で感じたのを今でも覚えております。検定統計量を提案する上で、統計量が不偏もしくは非不偏となることの証明は重要な研究課題であります。ノンパラメトリック法において、多くの検定統計量は漸近的に正規分布に従うので、漸近的に局所不偏になることはよく知られています。しかし、現実問題としては有限な標本サイズの下で不偏もしくは非不偏となることの検証が必要です。それにも関わらず、あまり研究がなされていないことを御教授いただきました。ノンパラメトリック検定の中で最も有名な検定統計量と言っても過言ではない Wilcoxon 順位和検定でさえ、不偏性および非不偏性に関する研究課題が残っていることを知ったことがきっかけとなり、不偏性および非不偏性に関する研究を始めました。特定の検定統計量に対して、不偏性や非不偏性が証明されているいくつかの論文の理論に感銘を受けました。それに加え、

“it is not known whether they are admissible within the class of all rank test” と Lehmann and Romano (Testing statistical hypothesis, 3rd edition, 2005) と述べられているように、少しでも広いクラスの検定統計量の不偏性、もしくは非不偏性の性質を証明することを目指しました。しかしながら、非不偏となることを示した内容を中心に論文を書いていたところ、常に「その理論（特異な場合）に当てはまるアプリケーションはあるのか？」と質問を投げかけられ、アイデアを受け入れてもらえないこともありました。このままでは、論文としてどこにも掲載することが出来ないのではないかとその思いから、前向きな内容である不偏性を証明することに方針転換したことによってアイデアを受け入れてもらえるようになり、多用されている複数のノンパラメトリック検定を一般化した検定統計量の不偏性を Murakami (2015a) や Murakami and Lee (2015) で示すことができたという経緯があります。

統計的仮説検定において、不偏性の証明と並んで検定統計量の精確分布の導出は必要不可欠な研究課題です。しかし、標本サイズが大きくなると精確な分布（棄却点）の導出は困難になると同時に、極限分布を用いることが出来ない状況も多く存在します。そのため、近似分布の導出が必要となります。標本サイズのみ依存する精確な高次モーメントが必要となりますが、ノンパラメトリック法において積率母関数が知られていない検定統計量がいくつも存在することをお教えいただきました。そこで、検定統計量の積率母関数および近似分布を導出することを目指しました。しかし、思い描いたような結果を出すことが出来ずに色々と模索していたとき、サドルポイント近似の魅力をお教えいただく機会がございました。そのアドバイスをいただけたお蔭で、最近の論文を挙げると Murakami (2016), Murakami (2015a), Murakami and Ha (2015), Murakami (2015b), Murakami (2015c), Ogura and Murakami (2014), Murakami (2014) など近似分布を提案することができました。

このように振り返ってみましても、これまでの研究やその成果は多くの先生方の御指導、周りの研究者との議論に大きく支えられてきたものであり、多くの出会いに恵まれたと感謝の気持ちでいっぱいです。今後も日本統計学会研究業績賞の受賞を励みに、更に研鑽を積み、自身の研究に邁進していくと同時に、少しでも日本統計学会の発展に貢献出来るように努めてまいりたい存じます。最後になりますが、この場をお借り致しまして、日頃より私を一生懸命支えてくれ、研究に没頭できる環境を作ってくれる妻に心から感謝致します。今後とも御指導、御鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。この度は、大変光栄な賞を授与して戴きまして本当に有難うございました。心より御礼申し上げます。

2.5 第9回日本統計学会出版賞受賞 受賞のことは

柳川 堯（久留米大学）

この度は、「バイオ統計シリーズ」に対して日本統計学会出版賞をいただき誠に光栄です。ご推薦いただいた方々および審査委員の皆様には感謝いたします。本シリーズは全6巻からなるシリーズです。各巻の執筆者（荒木由布子、角間辰之、服部 聡、赤澤宏平、館田英典、柳川 堯）全員が、がん首並べ、出版していただいた近代科学社とともに共同受賞させていただいたものと考え有難く受け止めています。

私どもは、平成15年度科学技術振興調整費による文部科学省新興分野人材育成事業に採択していただき、久留米大学大学院医学研究科にバイオ統計学の修士課程（定員10名）、博士課程（定員5名）を立ち上げ、文科省の事業終了後は久留米大学法人の支援をいただいてバイオ統計学の大学院プログラムを継続しバイオ統計学の人材育成に全力を尽くしてきました。本シリーズは、この人材育成の過程で行われた様々なバイオ統計学の講義を掘り起こして執筆されたものです。文科省の新興分野人材育成事業採択を決定するためのヒアリングで、日本の国立大学の講座制では高々、教授、

准教授、助教の3名体制での育成事業になってしまうこと、それでは極めて幅広い分野に係るバイオ統計学の人材育成には無理があること、久留米大は臨床データ解析、ゲノムデータ解析、環境データ解析の3本柱をたて各柱には少なくとも2名の専門家を専属スタッフとして配置すること、またアメリカの大学院バイオ統計学科並みの15のバイオ統計学コアカリキュラムを立て、6名のスタッフでカバーできない分野は国内外の第一線で活躍する研究者を非常勤講師として招へいし講義を実施することを強く訴えました。文科省から、国内の大学のモデルとなるバイオ統計学コースを作ってほしい、また実施した講義はテキストとして出版してほしい、という力強い励ましをいただきました。

テキストの出版をいくつかの出版社にもちかけたところ「バイオ統計学？それって何？」という反応しか返ってこなかった当時の世相の中で小山透氏（近代科学社社長）に「重要な分野ですネ、それうちで引き受けましょう」と快く言っていただき、本シリーズが日の目をみるころとなりました。同社編集部の大塚浩昭さん、および名前は挙げませんが多数の関係者から多大なご支援を頂きました。深く感謝いたします。

出版賞を右手に、テキストシリーズを左手にかかげ文科省に胸を張って成果を報告することが出来ます。また、バイオ統計学の重要性をいち早く見抜き、大学を説得しバイオ統計センターおよび大学院プログラム設置実現に道を開いていただいた永田見生久留米大学整形外科教授（現久留米大学学長）にも胸を張って成果を報告することが出来ます。嬉しい限りです。最後になりましたが、講義テキストの出版に関して貴重なアイデアを頂いているさなかに不慮の病で旅立たれた旧サイエンティスト社社長の故大野満夫さんに特別の感謝を捧げます。

株式会社近代科学社

このたび、柳川堯先生と共に「第9回日本統計学会出版賞」を受賞させていただくこととなりました。

して、感激の極みでございます。ご推薦くださった方々、審査委員の皆さま、そして柳川先生をはじめとする本シリーズの編集委員の方々・各巻執筆者の方々に深謝申し上げます。

受賞対象の「バイオ統計シリーズ」は、私が前職（共立出版）から近代科学社に移籍して、初めての大型シリーズ企画でした。2008年から立ち上げ、第1巻『バイオ統計の基礎』を2010年に発刊して以来、本年5月には全6巻の完結を果たすことが出来ました。

ご承知のとおり、専門書出版業界はたいへん厳しい環境の中にありますが、弊社としては、本出版賞の授賞理由にございます「このシリーズを出版した近代科学社の慧眼も評価に値する」というお言葉を大きな励みとして、統計学分野のさらなる出版活動に邁進してゆく所存でございます。

今後とも、何卒よろしく願いいたします。

2.6 第30回日本統計学会小川研究奨励賞 受賞のことは

廣瀬 善大（東京大学）

このたび第30回小川研究奨励賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。伝統ある賞をいただくにあたり、様々なご指導とご助言をくださった多くの方々に感謝申し上げます。賞の名に恥じぬよう、より一層研究に励む所存です。

受賞論文となりました“An estimation procedure for contingency table models based on the nested geometry”では、それ以前の論文で提案していたパラメータ推定手法である Bisector Regression 法（BR 法）の分割表モデルへの応用に取り組みしました。交互作用の度数に応じた空間の入れ子構造を利用して、分割表モデルに対してスパース推定を行う方法を提案しました。分割表モデル特有の問題を含め、指数型分布族の情報幾何学に基づいたパラメータ推定を扱いました。

BR 法は、一般化線形回帰モデルに対するパラメータ推定手法で、角の二等分線を拡張した曲線を利用してパラメータ推定と変数選択を行います。正規線形回帰モデルに対するパラメータ推定・変

数選択手法である Least Angle Regression 法（LARS 法）のアルゴリズムにおいて推定量を得るために角の二等分線を利用していたことをもとに、より大きなモデルを対象にし、さらに改良を加えて得られたのが BR 法です。大学院生時代に指導教員の駒木文保先生から LARS の論文（Efron, Hastie, Johnstone and Tibshirani, 2004）を紹介していただき、勉強しました。LARS 法の最初の印象は「すごく簡単な手続きだ」というようなものであったと記憶しています。LARS アルゴリズムの記述は簡潔であり、変数間の相関に基づくアルゴリズムは直観的にも分かりやすく、なぜ2004年の論文まで誰も提案しなかったのが不思議に思われるような方法でした。それでいて、LARS を通して LASSO 等の既存手法を幾何的な視点から統一的に扱うことができ、非常に魅力的でもありました。

受賞論文で重要な道具となったのが情報幾何学です。正規分布モデルとユークリッド空間との間にある対応を一般化することで、指数型分布族の幾何として現れるのが双対平坦空間の情報幾何です。ユークリッド幾何ほどの分かりやすさはないものの、自然パラメータと期待値パラメータが双対な関係であることやピタゴラスの定理が成り立つことなど、統計学において非常に便利な性質を多くもっています。個人的な思い出として、大学院修士課程への進学を考えていた時期に、情報幾何の研究をしてみたいと考えて入試願書を提出したことを記憶しています。東京大学大学院情報理工学系研究科数理情報学専攻の数理4研（当時は竹村・駒木研でした）に入り、他の大学院生と一緒に甘利先生のレクチャーノートを勉強しました。情報幾何というと、時に敷居が高いという話を聞くこともありますが、少なくとも様々な議論の共通しをよくするという点において非常に有用で、またユーザとしての敷居は必ずしも高くないのではないかと感じています。

最後になりましたが、これまで研究環境に恵まれてきたことが今回の受賞につながりました。学生時代からご指導くださいました駒木文保先生には大変お世話になりました。この場をお借りして

感謝申し上げます。また、大学院生として研究室に配属されて以降これまでお世話になりました竹村彰通先生、清智也先生、田中冬彦先生、鈴木大慈先生には多くのご助言をいただきました。他にも多くの先生方、先輩方、同期や優秀な後輩達の

おかげで研究・勉強しやすい環境で過ごすことができました。ありがとうございました。

今後も研究に精進いたします。ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

3. 2016年度統計関連学会連合大会の報告

2016年度統計関連学会連合大会

運営委員長 桜井裕仁（大学入試センター）

実行委員長 星野伸明（金沢大学）

プログラム委員長 林 篤裕（名古屋工業大学）

3.1 大会概要報告

桜井 裕仁（大学入試センター）

2016年度統計関連学会連合大会は、2016年9月4日（日）～7日（水）に統計関連学会連合に所属する6学会（応用統計学会、日本計算機統計学会、日本計量生物学会、日本行動計量学会、日本統計学会、日本分類学会）の主催、統計教育大学間連携ネットワーク（略称 JINSE）の共催により開催されました。4日はチュートリアルセッションと市民講演会が石川県教育会館（金沢市香林坊）にて、5日～7日は本大会が金沢大学角間キャンパスにて、それぞれ行われました。

参加者数は延べ1,265名（チュートリアル参加者数252名、市民講演会参加者数197名、本大会参加者数816名）、講演件数は399件（キャンセルを除く）にのぼり、今年度の大会は盛会のうちに終了しました。講演件数の内訳は、企画セッション153件、一般セッション208件、コンペティションセッション32件、ソフトウェアセッション6件でした。また、一部の企画セッションは、金沢大学人間社会研究域経済学・経営学系の主催、文部科学省（統計数理研究所）、統計関連学会連合の共催により数学協働プログラム・ワークショップとして開催され、24件の講演がありました。懇親会は6日の19:00からKKRホテル金沢（金沢市大手町）にて行われました。260名ほどの参加者が集まり、金沢芸妓の長唄披露、郷土料理や石川県

内の銘酒の数々なども楽しんでいただきました。

今回の大会が無事に終了し、また大会の円滑な運営を行うことができたのも、ひとえに関係者の皆様のご理解とご支援によるものと心より感謝しております。講演者、座長、企画セッションオーガナイザー、参加者の皆様に御礼を申し上げます。連合大会は今回で15回目を迎え、運営のノウハウも少しずつ蓄積されていますが、今年度も委員の負担軽減のため、一部の事務局業務について外部委託を行いました。6学会の会員の皆様のご理解に感謝申し上げます。最後に、岩崎組織委員長、星野実行委員長、林プログラム委員長をはじめ、ボランティアで活動してくださいました、実行委員、プログラム委員および運営委員の皆様、金沢大学のアルバイト学生の皆様のご尽力に深く敬意を表します。

3.2 チュートリアルセッション・市民講演会報告

林 篤裕（名古屋工業大学）

例年と同様に今回の連合大会もチュートリアルセッションからスタートしました。今年のテーマは「統計・計算理論で広がる機械学習」とし、この分野の第一人者である鈴木大慈先生（東京工業大学）に3時間のご講演をお願いしました。

人工知能の技術を囲碁や将棋等のゲームに実装して、プロ棋士を負かせるまでになってきたこと

や、車の操舵に応用した自動運転は既に一部が実用段階に達しています。そこで今回はその一分野である機械学習を取り上げその基本的事項から統計理論および計算理論について最新の話題および、今後の課題について解説していただきました。近年注目されているホットなトピックであっただけに関心も高く、当日申し込みも含めて250名超が受講されました。

チュートリアルセッションに引き続いては、同じ会場で市民講演会を開催しました。これは統計科学の面白さを広く知っていただき興味を持ってもらおうと毎年開催している一般向けに公開された講演会です。今年は「地震研究に貢献する統計科学」と題して長尾大道先生（東京大学）にご講演いただきました。

阪神・淡路大震災や東日本大震災の例を挙げるまでもなく日本列島は地震に繰り返し襲われており、今春には熊本・大分でも大きな地震があり、現在も多くの方々が被災生活を送っておられます。そこで過去から現在に至る地震研究において、統計科学がいかに重要な役割を果たしているかについていくつかの事例を挙げながらご紹介いただきました。金沢は比較的地震被害の少ない地なのですが、一般市民の方々を含めて、200名近くが熱心に傾聴されており、当初の目的は達せられたものと考えております。

これら2つのイベントの開催に際して、ご多忙中ご講演を快くお引き受けくださった両先生に感謝申し上げることは勿論ですが、統計科学に関する魅力的・先進的なテーマを模索・提案いただき実現に漕ぎ着ける諸作業にご尽力くださったプログラム委員会の各委員にお礼を申し上げて本報告とします。

3.3 企画セッション報告

川端 一光（明治学院大学）

林 篤裕（名古屋工業大学）

大会2日目の5日（月）から3日間にわたって、ソフトウェア・デモンストレーションセッションを含む36件の企画セッションが開催されました。

英語による国際セッションが6セッション含まれていることもさることながら、想定を遥かに超える応募（前年度の倍近い）が有ったため事務局としては嬉しい悲鳴を上げつつ対応させていただきました。統計に関する多岐にわたるテーマで講演があり、熱心な意見交換が行われました。

この中の5つのセッションについては、次項で紹介されている文部科学省科学技術試験研究委託事業「数学・数理科学と諸科学・産業との協働によるイノベーション創出のための研究促進プログラム（略称：数学協働プログラム）」によるワークショップ「統計科学の新展開と産業界・社会への応用」として、金沢大学人間社会研究域経済学・経営学系が主催し、文部科学省（統計数理研究所）および統計関連学会連合との共催事業として一般に公開され、多くの方々が参加されました。

今回開催された企画セッションのテーマとオーガナイザーを以下に示します。

(1) Recent statistical methods in medical and biological sciences 小森理（福井大学）・Hung Hung（National Taiwan University）

(2) 公的統計における新たな地平の拡大ービッグデータと行政記録の可能性 椿広計（独立行政法人統計センター）・小林良行（総務省統計研修所）・伊藤伸介（中央大学）

(3) 日本計量生物学会シンポジウム「臨床試験における質管理・質保証のための統計的モニタリング」 手良向聡（京都府立医科大学）・大庭幸治（東京大学）

(4) 日本計量生物学会奨励賞受賞者講演 大森崇（神戸大学）

(5) 欠測データの解析：基礎理論と実践的な方法論の発展 星野崇宏（慶應義塾大学）・野間久史（統計数理研究所）

(6) 超高速グラフ列挙法と統計学への応用 水田正弘（北海道大学）・湊真一（北海道大学）・栗原考次（岡山大学）

(7) 地域創生のための多次元データ活用 久保田貴文（多摩大学）

(8) 国民経済計算および資金循環統計における

2008SNA の導入 吉野克文（総務省（元青山学院大学））

(9) 応用統計学会賞表彰式と応用統計学シンポジウム「統計モデルとマーケティング」 佐藤忠彦（筑波大学）

(10) 統計数理研究所公募型共同利用重点型研究「リスク科学のフロンティア」 山下智志（統計数理研究所）・黒木学（統計数理研究所）

(11) 若手研究者セッション：これからの統計科学を考える 酒折文武（中央大学）・川野秀一（電気通信大学）

(12) スパース正則化による統計的モデリング 川野秀一（電気通信大学）・藤澤洋徳（統計数理研究所）

(13) 大規模時系列データの従属性モデリングと漸近推測論 清水泰隆（早稲田大学）

(14) データサイエンスの世界的潮流とその展望 柴田里程（慶應義塾大学）

(15) 日本統計学会 各賞授賞式および受賞者記念講演 中野純司（統計数理研究所）

(16) Akaike Memorial Lecture 樋口知之（統計数理研究所）・岩崎学（成蹊大学）

(17) 日本分類学会シンポジウム「分類理論の最前線」 横山暁（帝京大学）

(19) IFCS-2017：ビッグデータとデータ分析・分類手法 今泉忠（多摩大学）

(20) スポーツアナリティクスの広がり 酒折文武（日本統計学会スポーツ統計分科会 / 中央大学）

(21) Incomplete Data Analysis and SEM 伊森晋平（大阪大学）・狩野裕（大阪大学）

(22) 公的統計の精度改善に関する多角的取り組み 椿広計（独立行政法人統計センター / 統計数理研究所）

(23) ライフイノベーションを推進するバイオメディカルビッグデータ解析の新潮流 島村徹平（名古屋大学）・新井田厚司（東京大学）・白石友一（東京大学）

(24) 高次元かつ複雑なデータの統計解析 鎌谷研吾（大阪大学）

(25) アジアの公的ミクロ統計の活用 馬場康維

（統計数理研究所）

(26) 日本計算機統計学会企画セッション「臨床研究における統計家の倫理的役割」 渡辺敏彦（日本 CRO 協会）

(27) 統計教育大学間連携ネットワーク（JINSE）の展開 美添泰人（青山学院大学）

(28) 産官学共創の統計科学・データサイエンス人材育成基盤整備Ⅰ 竹内光悦（統計教育委員会委員長 / 実践女子大学）・藤井良宜（統計教育分科会主査 / 宮崎大学）・渡辺美智子（慶應義塾大学）

(29) 産官学共創の統計科学・データサイエンス人材育成基盤整備Ⅱ～次世代型統計教育における科学的探究力 竹内光悦（統計教育委員会委員長 / 実践女子大学）・藤井良宜（統計教育分科会主査 / 宮崎大学）・渡辺美智子（慶應義塾大学）

(30) ランチセッション「統計検定についてディスカッションしよう！」 森裕一（統計質保証推進協会事業委員 / 岡山理科大学）

(31) Quantitative Risk Management in Finance（ファイナンスにおける定量的リスク管理） 塚原英敦（成城大学）

(32) JSCS-JSS International session I --- Statistical Modeling and Analysis for Complex Data Ying Chen（National University of Singapore）, 塚原英敦（成城大学）

(33) JSCS-JSS International session II --- Recent developments in multivariate analysis 塚原英敦（成城大学）

(34) JSCS-JSS International session III --- Miscellaneous Topics in Modern Statistics 塚原英敦（成城大学）

(35) ヒトゲノムデータの遺伝統計解析 鎌谷洋一郎（理化学研究所）

(36) 社会経済の長期的変動に対応した世帯概念の再構築 松田芳郎（一橋大学）・仙田徹志（京都大学）・馬場康維（統計数理研究所）

(37) ソフトウェア・デモンストレーション

3.4 文部科学省 数学協働プログラム・ワークショップ報告

星野 伸明 (金沢大学)

2016年度統計関連学会連合大会において、金沢大学人間社会研究域経済学・経営学系が主催し、文部科学省（統計数理研究所）および統計関連学会連合の共催で、数学協働プログラムによるワークショップ「統計科学の新展開と産業界・社会への応用」を9月5日、6日の2日間にわたって開催いたしました。

昨年に引き続き今年度も特に産業界・社会への広範囲の分野における応用に、数学・数理科学の知見をどのように活用していくことができるのかを明らかにしていくため、大会の企画セッションのうち、「欠測データの解析：基礎理論と実践的な方法論の発展」、「超高速グラフ列挙法と統計学への応用」、「スポーツアナリティクスの広がり」、「ライフイノベーションを推進するバイオメディカルビッグデータ解析の新潮流」、「ヒトゲノムデータの遺伝統計解析」の5つのセッションによってワークショップを構成しました。

ワークショップでは、統計数理研究所の伊藤聡先生による数学協働プログラムの活動紹介に引き続き、合計24の講演が行われました。大学・研究所等機関の他、それぞれの話題に関連した様々な産業界から研究発表者をお迎えし、活発な議論が交わされました。ワークショップ会場は常に熱気であふれ、参加者で会場が満員となることもありました。数学・数理科学に加えて諸科学の大学・研究所や産業界・官庁など広範囲からの参加者があり、成功裡に終えることができました。これもひとえに、セッションオーガナイザーが取り上げてくださった魅力的なテーマ、講演者の方々の興味深い研究発表、参加者の皆様との活発な議論の賜物と、心より皆様に感謝を申し上げます。

最後に、プログラムを選定してくださった大会プログラム委員長である名古屋工業大学の林篤裕先生には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

3.5 コンペティションセッション報告

谷崎 久志 (大阪大学)

コンペティションセッションへの応募者は、一昨年度29名、昨年度30名、今年度32名と年々増加傾向にあります。今年度は2日間にわたって、合計5つのコンペティションセッションが設けられました。報告者は一セッション当たり6～7名とし、出来るだけ同じような研究分野になるようなセッションにしました。審査では、研究内容だけでなく、研究発表のプレゼンテーションについても評価されます。限られた時間で、専門外の人に対して、いかに自分の研究内容を報告するかということが重要な評価項目です。

審査委員につきましては、今回は1つのセッションにつき様々な分野の方々6名の審査委員を配置して、合計20名の方々に審査委員をお願いしました。審査委員が専門外の内容を審査するということがあります。限られた時間で、専門外の人に対して、いかに自分の研究内容を報告するかがこのコンペティションの趣旨です。審査は1～5の5段階評価として、特に、スコアが偏らないように、2～4にはできるだけ均等な人数になるようにと審査委員にはお願いしました。審査票を見ると、今回も僅差で、優秀・最優秀報告賞となりました。選考の結果、優秀報告賞4件、最優秀報告賞1件が選ばれ、6日（火）の17:00から表彰式を執り行いました。

私も全部のセッションを出たわけではありませんが、皆さん優れた研究をされているという印象でした。賞に漏れた方は気落ちすることなく、今後も研究を続けてください。漏れたの方が、結果的に、評価が高い研究だった（すなわち、トップ・ジャーナルに掲載された）というケースは多々あります。

最後になりますが、審査委員をお引受けいただいた方には、この場を借りて心より御礼申し上げます。なお、今年度の入賞者は下記の通りです。

最優秀報告賞（1件）

江江 遼平（東京大 情報理工）

「無限混合モデルによる神経スパイク発火率の推定とニューラルデコーディングへの応用」

優秀報告賞（4件）

今泉 允聡（東京大 経済）

「作用素推定による非線形関数回帰」

高島 哲也（大阪大 基礎工）

「フラクショナル確率ボラティリティモデルに対する高頻度データ解析」

富田 裕章（総合研究大学院大 複合科学研究科）

「欠測値を含むデータに対する多重代入法を用いた推定量の補正について」

中山 優吾（筑波大 数理物質科学）

「高次元小標本におけるサポートベクターマシンの漸近的性質とバイアス補正」

3.6 コンペティションセッション受賞者の言葉

最優秀報告賞

浜江 遼平（東京大学）

このたびは最優秀報告賞をいただき、大変光栄に存じます。企画運営に携わられた先生方、ならびに講演を聴いてくださった方々に厚く御礼申し上げます。また、指導教員の駒木先生をはじめ、日頃ご指導いただいている方々に心より感謝申し上げます。

本報告では、無限混合モデルを用いた神経スパイク発火率の推定手法について紹介いたしました。最近の研究で、神経スパイクデータをマーク付き点過程で表現してデコーディングを行うという手法が提案されたのですが、この手法は条件付き強度関数の推定において精度や計算量の面で問題を抱えていました。そこで本発表では、条件付き強度関数をノンパラベイズのアプローチで推定してデコーディングを行う手法を提案し、デコーディングの精度の向上および計算量の改善を確認いたしました。今後は、他の計測手法で計測した神経スパイクデータに対しても適用できるよう、提案手法を拡張したいと考えております。

統計関連学会連合大会においては馴染みの薄い

テーマであるため、発表前は分かりやすく説明できるか不安だった分、このような賞をいただき大変うれしく思っております。今回の経験を励みに、今後も神経科学と統計学の両面から研究に取り組んでまいりますので、ご指導よろしく願いいたします。

優秀報告賞

今泉 允聡（東京大学）

この度は、2016年度の統計関連学会連合大会におきまして優秀報告賞という名誉ある賞を頂き、大変光栄に思っております。またこの場をお借りしまして、学会を運営してくださっている先生方、日々の研究生活の中で指導や議論をしてくださる大学・研究所の先生方や同僚の皆様に、感謝の気持ちを申し上げたいと思います。

私は統計学の研究において、良い推論が可能になる統計モデルの境界は何か、という問いに関心を持っています。今回の発表では、関数データ解析の非線形回帰問題というトピックの統計モデルに注目し、回帰の作用素がどういった性質を持っていれば良い推定が可能であるかを考え、私なりの解を提案しました。

依然解決すべき課題も多く、まだまだ先の長い研究ですが、今回の受賞を励みとし一層努力していきたいと考えていますので、今後ご指導頂けると幸いです。

高島 哲也（大阪大学）

この度は、コンペティション講演にて優秀報告賞を頂くことができ、大変光栄に感じております。ご多忙中、審査や運営をして下さった多くの方々、そして日ごろからご指導いただいている深澤正彰先生に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本報告では、確率微分方程式を用いて記述される、フラクショナル確率ボラティリティモデルと呼ばれる対数株価モデルに対して、データが有限期間に高頻度観測される状況に基づく未知定数の統計的推測問題を考察し、これまでに得られた結

果を報告させて頂きました。今後の展望としては、これまでに得られた理論的結果を実データに応用することで、人類が新たな知見を獲得することに寄与できればと考えております。

今回の受賞を励みに、今後も統計学を通して科学の発展に貢献する研究を行っていく所存です。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

富田 裕章（総合研究大学院大学）

この度は統計関連学会連合大会コンペティションセッション優秀報告賞を頂き、大変光栄に存じます。審査委員の先生方、および大会を企画運営されている先生方に厚く御礼申し上げます。また、平素より大変熱心に指導いただいております、統計数理研究所の逸見昌之先生、藤澤洋徳先生に心より感謝申し上げます。

本報告では、欠測値を含むデータに対して、欠測値を補完することによって解析を行う多重代入法（Multiple Imputation）に関して、特に補完方法が妥当ではない場合に推定量を求める際に起こりうる問題とその解決方法について提案を行いました。具体的には、補完値に関する尤度を計算する際に、真の分布と補完値が従う分布との比を用いた重み付き尤度推定を行うことで一致性のある推定量を導出し、さらに比を機械学習の手法を用いたノンパラメトリック推定によって求めて数値実験を行い、有用性について示しました。

欠測に関係した問題には、多くの解決すべき問題が残っていると考えております。今回の受賞を励みにし、さらに深みのある研究を行うべく精

進して参りたい所存です。

中山 優吾（筑波大学）

この度は、コンペティション講演において「優秀報告賞」という荣誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。審査をはじめとして、コンペティション講演を企画・運営して下さった大会関係者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。日頃から熱心に且つ厳格に指導して下さっている青嶋誠先生、矢田和善先生には、心から感謝しております。また、発表練習にお付き合い頂いた青嶋研究室の先輩や後輩の皆様にも、この場をお借りして御礼申し上げます。

本報告は、高次元データ解析でしばしば用いられているサポートベクターマシン（SVM）という判別方式について、高次元小標本における漸近的性質を明らかにし、SVMの危うさを理論的に示しました。この問題を解決するために、SVMに対してバイアス補正を理論的に与え、それが高次元で完全分類を達成することを証明しました。幸いバイアス補正の計算は簡単なものなので、高次元データ解析の現場で広く使って頂ければと思います。本報告では線形の場合についてのみ言及しましたが、非線形の場合にも拡張できるものと確信しております。今後は、非線形についても研究を進め、背後にある真理を数学的に探究できればと考えております。

今回の受賞を励みに、青嶋先生からいつも言われている「意義ある革新的研究と社会への貢献」を実現できるように、これからも日々精進して参ります。

4. 第11回日本統計学会春季集会のお知らせ（第一報）

中野 純司（日本統計学会理事長）

青木 敏，田中 研太郎，二宮 嘉行（企画・行事担当）

土谷 隆（春季集会実行委員長）

第11回日本統計学会春季集会を下記の要領で開催いたします。

春季集会には口頭発表セッションとポスターセッションがあります。

口頭発表のセッションは招待講演を基本としますが、会員の皆様からのセッションのご提案も受けいたします。セッションのご提案は

11月11日（金）

までに下記青木宛てにお知らせください。

aoki@math.kobe-u.ac.jp

なお、会場等の関係で、開催できるセッション

は限られていますので、ご希望に添えない場合があります。

ポスターセッションではポスター発表を広く募集します。申込み締め切りは2月中旬を予定しています。詳細は次号の会報にてご案内いたします。

多数の会員の皆様のご発表とご参加をお待ちしています。

・期日：2017年3月5日（日）

・会場：政策研究大学院大学

（東京都港区六本木）

・参加費：無料（ただし懇親会は有料）

5. 特集記事

シリーズ「統計学の現状と今後」

国際交流雑感

谷口 正信（早稲田大学理工学研究所）

もう私の40年近く昔のことであるが、大阪大学の博士課程途中で広島大学助手として研究者の一步を踏み出した。当時、広島大学の統計関係には、国際性をもった論文多産家が多く、海外からの研究者来訪も、相当の頻度であった。印象に残るのは、やはり、Australian National University (ANU) の Ted Hannan 教授が、広島に1週間ほど滞在された。当時の時系列解析の世界的大家であるので、これは千載一遇の機会と思い諸接待をさせていただいた。しかしながら、例えば宮島への観光船の中では、居眠りをされる有様で、その他、全般に「おもてなし」を好意的に思われていないと悟った。もちろん学問的な議論も投げかけて基本的には有意義な交流になった。その後、しばらくして、

私は Ted から ANU に招聘されることになった。当時の首都キャンベラは、人工的地方小都市の印象で田舎生まれの私にはいい雰囲気にも思われた。Ted は高等研究所の教授で、その Dr 職に、Daley、また経済学部には Peter Hall がいて、セミナーには Heyde や Speed など顔もだす大変立派な人的環境であった。当時、私はまだ駆け出しの研究者で、かたや Ted は大横綱であったので、彼が私を研究上使ったり、私にその他の貢献を求めるのではなく、豪州に招聘して、遊ばせて貰ったというのが私の認識である。後年、私が外国研究者を招聘できる立場になってからは、招聘するからには、こういった貢献を求めるといった「無裁定 = no free lunch」の俗心が常に出て、横綱相

撲には、ほど遠い有様である。

その後、しばらくして、米国 Pittsburgh Univ. の Center for Multivariate Analysis への招聘をうけることになり、Krishnaiah, C.R.Rao 両教授のもとで研究をすることになった。インド系の研究者の中では、共同研究への貢献が求められ、ある面、分かり易い招聘論理で何編か多変量時系列で共同論文を Krishnaiah と書くことができた。私は多変量解析自体の専門家ではないが、当時 JMA の Editor であった Krishnaiah に、こういった解析で最先端の多変量解析の論文は何かと聞けば、即、教えてくれたので、短期間で時系列と多変量解析のハザマの研究ができ有意義であった。

大阪大学に転任後、ソウル国立大学の Sangyeol Lee 教授から招聘をうけ、その時、彼が言っていたのは、韓国でも、それまで、欧米からの研究者招聘に力を入れていたが、近隣のアジアの国々に立派な研究者が多数おり、しかも、国内旅費ぐらいで招聘できることに気付いたとのことであった。同感し、私もその後、Sangyeol や香港の N.H. Chan 教授、さらには台湾の研究者達もふくめ相互招聘する交流がつづき、関係者が皆グルメなので、東京、ソウル、香港、台湾の“gourmet-square relationship”と名付けている。もちろん、グルメだけでなく、研究も、欧米で Ph-D 取得されたり、そこで教授職を経験された人達があり、すこぶる high-standard なので、近年は、アジアの国々間での研究交流の重要性が大きく増してきたと感じている。

ISI 北京大会でブリュッセル自由大学 (ULB) の Marc Hallin 教授と知り合い、そこで ULB の滞在教授として招聘された。1990年半ばのブリュッセルは中世の雰囲気漂う美しい街で、Marc との共同研究とグルメが楽しめた。その後、私が早稲田大学に移ってからは、ULB と早稲田の二国間共同研究 (JSPS) によって、双方の研究グループの早稲田とブリュッセルでの交流機会を得て、その共同研究が終わった後も、個人的交流関係は私以外のメンバーも続いている。ということでブリュッセルを訪れる機会が多いが、回を重ねるご

とに人種混合が増している印象があり、また街の汚れを意識させられ、さらには治安も危うさを感じるのは私だけであろうか？

早稲田大学において、私は、この10年、基盤 (A) による研究推進を進めており、多数の海外からの研究者を招聘した。多くは期間が1週間程度なので、全くの儀礼的なものになったりしがちであるが、部分的には、周辺の研究者も巻き込んだ形での発展的国際交流になって来つつある。最近の例では、ドイツ、

Bochum の Holger Dette 教授が、拙所の PD 2 名を気に入って Bochum に招聘してくださった。その後も、若手研究者の活躍できる機会は世界諸所に広がりつつある。

私の最近印象に残ったことでは、Queen Mary Univ の Liudas Giraitis 教授よりロンドンに招聘されたとき彼のホスピタリティーで、連日、観劇、コンサート、グルメ、観光接待を受ける中、実質5日間で共同論文のメドを立てた。これは、ひとえに彼の有能さによるものであるが、あまりに High efficient な招聘であるので疲れるものであった。

昨今、政府の政策として、インバウンドがとやかく言われており、これは来日観光客を増やし、彼らに消費をさせる点に力が置かれていると思われる。統計学の研究者のインバウンドを考えるなら、単に来日人数を増やすのではなく、それによって相互の研究進展が増大することが最も重要と思われる。また研究者交流においてはインバウンドとアウトバウンドは双対であり、片方だけが進むのは歪んだものである。したがって以下、すべてインバウンドとアウトバウンドを入れ替えても読めるべきである。自分の経験を述べるなら

- (i) 自国側への貢献にこだわらない「横綱相撲のインバウンド」
- (ii) give & take のはっきりした共同研究遂行のためのインバウンド
- (iii) 何等かの資金を元にした、2国、他国間のグループ研究交流
- (iv) アジアの国々の研究者達と相互交流関係

(ユーロ圏のそのような)

(v) 超短期間に何事でもやる「High efficient なインバウンド」

ぐらいであろうか ,,,, (ii), (iii), (iv) が標準的と思われるが、俗世間に生きていると諸事、Profit, return に目線がたって (i) のようなインバウンドはなかなかできないものであるが、逆に長い人生の中で印象に残るものであり、最近、外国の有名大学で大変優秀な若手研究者に会うと、(i) の招聘をしたくなることがある。また近年、アジアのやり手研究者と会話していると、博学さ、頭のキレは、欧米の大家と呼ばれる人達のレベルと全く遜色なく、シンガポールぐらいまでを含めたアジア研究交流圏の構築 (iv) が必須であろう。

最近、海外からの観光客が日本人が知らない地方都市で新しいホットスポットを見出して、逆に、我々の興味をひいたり、盆栽美術館に外人客が群がっていると聞いて、学問の交流も、同じではないかと思われる。つまり、我々が日常使っている

手法が、外国人研究者には目新しく見えて、その指摘が双方へハイブリッドな高みを生むのではと思われる。単に利得目線では、研究インバウンドも長続きせず交流による独創性は育たないのではないかと思われる。

老齢の私は陶磁器が好きであり、伊万里（有田）焼は好きなものの一つである。伊万里焼も、もとは、中国大陆、朝鮮半島の作陶の流れの真似で、朝鮮陶工が有田で始めた。しかしその後、我が国独特の *sophistication* を発展させていく。また伊万里港から伊万里の名前で欧州に渡り、マイセンやロイヤルコペンハーゲンなどにも影響を与えた。これら欧州の磁器も、その後、独自の雰囲気を出していく。研究インバウンドも、当初は外国の真似でも、インバウンド、アウトバウンドの中で独自の進化、*sophistication* を得て、それが双方や他所へのハイブリッドな影響を与えていくことが肝要かと思われる。

6. 統計検定 RSS/JSS 試験 優秀成績賞の授与について

岩崎 学（日本統計学会会長）

2016年5月に実施した統計検定 RSS/JSS 試験 Graduate Diploma において、極めて優秀な成績で全てのモジュールの平均点が100点満点中75点以上である Pass with Distinction としても認定されました。

小田 秀匡さん（スマートニュース株式会社）

に対し、日本統計学会では「統計検定 RSS/JSS 試験 最優秀成績賞」贈呈し、表彰することになりました。表彰式は、2016年9月6日、2016年度統計関連学会連合大会の「日本統計学会各賞授賞式」のセッションにおいて行われました。

7. RSS/JSS 試験（2016年5月実施）合格者

中野 純司（日本統計学会理事長）

統計検定の一環として英国の The Royal Statistical Society と契約を結び2012年より RSS/JSS 試験を行っています。RSS/JSS 試験 (Higher Certificate) は全部で8モジュールからなり、そのうち6モジュールに合格すると、RSS および

JSS の連名で Higher Certificate が認定されます。

RSS/JSS 試験 (Graduate Diploma) は全部で5モジュールからなり、すべてのモジュールに合格すると、RSS および JSS の連名で Graduate Diploma が認定されます。ここでは2016年5月に

実施された試験の合格者のうち公開を希望されない方を除く方々の氏名を、Higher Certificate の認定者およびモジュールごと、Graduate Diploma の認定者およびモジュールごとに掲載します。掲載は姓のアルファベット順です。

(注) Higher Certificate 合格者での上付きの *C は Pass with Credit, *D は Pass with Distinction を表します。

無印は合格を表します。

Higher Certificate の認定者：

石橋佳久 *C, 岡部格明 *C, 河相健二 *C, 久保真 *C, 田中弘之 *C, 野呂竜夫 *C, 間崎武郎 *C, 胡内健一, 小林記緒, 野川和幸

モジュール 1 (データの収集と解釈)：石橋佳久, 大澤隆之, 朱匡一, 鈴木直矢, 田中弘之, 田中政任

モジュール 2 (確率モデル)：石橋佳久, 鈴木直矢, 田中弘之, 田中政任, 中山昌紀

モジュール 3 (基礎的な統計的方法)：岡部格明, 胡内健一, 小林記緒, 田中弘之, 野呂竜夫, 平井宏英

モジュール 4 (線形モデル)：石橋佳久, 岡部格明, 胡内健一, 田中弘之, 田中政任, 平井宏英

モジュール 5 (確率と統計的推測の発展内容)：

石橋佳久, 岡部格明, 胡内健一, 小林記緒, 鈴木直矢, 田中弘之, 中山昌紀, 野川和幸

モジュール 6 (統計学の発展的応用)：河相健二, 木村敏明, 久保真, 胡内健一, 田中弘之, 間崎武郎, 光廣正基

モジュール 7 (時系列と指数)：石橋佳久, 大下健史, 栗村信一, 田中弘之

モジュール 8 (調査のための抽出と推定)：大澤隆之, 田中政任, 野呂竜夫

Graduate Diploma の認定者：

小田 秀匡 *D, 草場 穂

Module 1 (Probability distributions)：小池 健太, 新出宏樹, 長島孝至, 安田友明

Module 2 (Statistical inference)：草場穂, 工藤誠也, 新出宏樹, 安田友明

Module 3 (Stochastic processes and time series)：秋田成幸, 工藤誠也, 新出宏樹, 安田友明

Module 4 (Modelling experimental data)：小田秀匡, 草場穂

Module 5 (Topics in applied statistics)：小田秀匡, 小池健太, 竹内維斗文, 安田友明

8. 2016年6月統計検定の成績優秀者

中野 純司 (日本統計学会理事長)

2016年6月29日に第8回目の統計検定が4試験種別で行われました。以下に、各試験種別の合格者のうち、成績優秀者でかつ公開に同意された方々の氏名を掲載します。掲載は姓の五十音順です。また以下の情報は統計検定のホームページでも公開しております。

準1級

最優秀成績賞 (S)：井手野泰久, 伊東弘晃, 大賀晃弘, 勝島啓介, 高橋佳苗, 高見真宏, 田中孝志郎, 古谷洸貴

優秀成績賞 (A)：秋元裕介, 荒野俊平, 池田達哉, 臼井猛, 恵口響, 小笠原澤, 奥村和生, 金

澤穂高, 小池健太, 高野純二, 竹内太郎, 多淵知樹, 土田暁人, 中谷太一, 中村誠, 松本千裕

2級

最優秀成績賞 (S)：壹岐和哉, 池亀和博, 池田大希, 磯村幸太, 岩永浩二, 恵口響, 遠田敏生, 大高靖慈, 大矢政基, 奥村和生, 小野寺輔, 勝島啓介, 木村直樹, 小池健太, 坂本亮, 鈴木健二, 高野蒼太, 高山綾太, 田中孝志郎, 中村光, 松岡昇, 松本千裕

優秀成績賞 (A)：秋元虹輝, 阿多晃平, 伊藤太郎, 稲葉豊, 近江信次, 岡林孝純, 加藤惇雄, 河野克明, 川森哲, 古城知祥, 小林学, 島谷真

樹，宗和也，陳靜慧，長島昭満，中山拓人，秦健三，原駿太郎，藤田健輔，前田将貴，宮脇健太，森本拓馬，吉安拓也，渡邊紀信，渡邊亮

3級

最優秀成績賞（S）：穂谷翔平，稲本大輝，岩木愛裕，浦川聡史，刈谷龍太郎，久保博司，小林俊敦，小林学，笹方正，玉井あゆみ，杖村諒，仲田哲，長久晃太，増田善樹，和田剛直

優秀成績賞（A）：飯塚希，石丸将司，井上進輔，今垣雄一，岡田大輔，笠井三千年，日下部徹，澤辺功，下山晃平，白石卓也，高橋九樹，高橋

伸一，竹内洋人，田中正人，田村茂義，中村光宏，中山将希，橋詰周，幅田隆，彦田智子，廣瀬実玖，松井義樹，松並純樹，八木下克，山崎明紀，山田理一郎，山本菜奈世，渡代隆介，渡邊洋一

4級

最優秀成績賞（S）：栗津慎也，門脇慎二，金子正朋，幅田隆，三戸勉

優秀成績賞（A）：佐藤健太，高橋諒，田村茂義，松本正樹，山田理一郎

9. 統計検定合格者の声

岩崎 学（日本統計学会会長）

統計検定（2016年6月19日実施）の合格者よりいただいた声を掲載します。

準1級合格

統計検定は自分の理解を再確認するために最適である。

小池 健太さん

（医療法人社団誠馨会総泉病院 薬剤部）

私は医薬品の情報管理を行っている薬剤師です。医薬品の情報を評価する際に活用する統計学の知識・技術が重要であると考え統計学の勉強をさせて頂いています。

今回受験するにあたり，準1級はまだ，公式テキストがないため，過去問題集を中心に1級と2級の公式テキストを活用することで理解を深め，出題範囲表を参考に上手く説明することができない内容に関して重点的に勉強させて頂きました。

準1級での問題は普段から業務などで活用している内容は自信を持って解答できる一方，ベイズの定理など考えさせられる問題もあり，統計学が扱う内容の広さを実感させて頂きました。また，論述問題では自分の知識を総動員し，自由に評価できる楽しさがありました。今回はA評価を頂きましたが，多変量解析，標本調査法などまだまだ，

理解が浅い部分をしっかりと確認させていただきました。今後理解が浅い部分を中心に勉強を進めることで，1級合格を目指して研鑽しようと考えています。

現代社会は情報を単に収集する能力よりむしろ，データを評価する能力が不可欠であると感じています。そのための根本的な能力として統計学の知識・技術が非常に有用であると考えています。

1つ1つ疑問点を潰していく。

松岡 昇さん（早稲田大学3年）

大学の様々な講義で統計の知識を扱うこともあり，一度きちんと総復習をする機会を持ちたいと考えていた折この統計検定を知り受験しました。2級，準1級共に合格することが出来て大変嬉しく思います。特に2級は最優秀成績賞をいただき驚いています。

準1級は昨年開始された新しい試験であること，2級よりも非常に範囲が広いことからなかなか勉強の指針が立たず苦労しました。手探りの勉強でしたが，受験後の感想としては要所を抑え，確実に解くべき問題を落とさないことが重要だと感じました。具体的な勉強方法としてはまず『統計解析法』（永田靖著）を通読し例題を丁寧に解いて

いきました。この際電卓を使いきちんと手を動かすことが試験本番にも生きてくると思います。その後は余力に応じて多変量解析法、実験計画法、機械学習の本を追加していただければと思います。そして過去問演習ですが、今後は例題集を含めれば実質3年分あることから比較的傾向はつかみやすいのではないかと思います。すべての問題にきちんと取り組んで、1つ1つ疑問点を潰していただきたいです。ここまで出来ればきっと合格水準には届くかと思います。

近年大規模データの活用注目が集まっておりデータ解析はあたかも何でも分かる魔法のように考えられがちです。しかしながら、強固な理論的知識がなければ最新の解析ソフトを用いても決して正しい解釈は得られないと思います。今回統計検定の学習を通じてそうした泥臭い取り組みが長い目で見れば必要になってくるのではと感じました。ハードルは高いと思いますが、在学中の統計検定1級及びアクチュアリー数学科目の合格を目指して今後もこつこつ勉強に励んでいければと思います。

2級合格

可能な限り手計算で問題を解いてみる。

大高 靖慈さん（フリーター）

統計検定の存在は、大学の友人が受験していたことがきっかけで知りました。私が卒業した大学の学科は教育心理学を専門としており、統計自体は大学に入ってから継続的に学び続けていました。

卒業してフリーターになった私ですが、まずは大学で学んだことをきちんと形にしておきたいと思い、統計検定の受験を決めました。統計検定のための勉強は、もちろん大学時代の教科書などもあったのですが、日本統計学会が公式で認定している2級用の参考書「統計学基礎」と過去問題集を使って学習を進めることにしました。「統計学基礎」は統計学の内容だけでなく、統計ソフトのRを使ったデータの処理についても学ぶことができるので、検定の内容を学ぶだけではなく、そこから実践へと繋げていくことも意識しながら学習

できると思います。過去問題集は解説も分かりやすく、試験対策の仕上がりには間違いなくお勧めです。過去問は2周しっかりと解いて練習しています。学習を始めたばかりの頃は、敢えて計算機の使用を控えめにして、可能な限り手計算で問題を解いてみたりもしていました。問題の考え方・解き方、覚えるべき式の意味をしっかりと理解できているか確認するためには有効だと思います。

幸い、検定を最優秀成績という良い結果で終えることができました。当初の目的通り大学で学んだことをきちんと形にしつつ、さらには自分の将来についての可能性を感じることもできたのでとてもよかったと思います。今後しっかりと勉強する時間が取れば準1級にもチャレンジしたいと思っています！

医学の分野でも統計学は大事。

池亀 和博さん（兵庫医科大学）

40（後半？）の手習いで、統計の勉強をしました。普段は骨髄移植（ってご存知ですか？）という治療法を専門にするお医者さんをやっています。確かに医学の分野でも統計学は大事で、特に臨床試験を組んだり論文を書くとなると、統計解析を避けては通れません。しかしながら御多分に漏れず、私も解析ソフト（EZRが使いやすいです）に意味も分からず数字を入れて、そのご託宣を日々いただいています。医学研究では、平均値の差の検定など初歩中の初歩なわけですが、それを使う医師の中に、それがt分布に従うことをきちんと説明できる人は何人いるのかなって思っちゃいます（たぶん0.1%もいないのでは……）。そんなわけでちょっと「いい恰好してみよう」という幼稚な動機だったわけですが、これがなかなか面白くて。ただ2級のレベルでは、上記のように、いつも使っている解析にはまだまだ歯が立たず、次は準1級、1級だ！と意気込んでいます。しかーし！準1級、1級のテキストって急に難しくないですか？「 $\Sigma -1/2$ には不定性があるが、正定値行列に限れば一意である。三角行列にとることもある。」???「正定値」って初めて聞く言

葉だ……。行列の $-1/2$ 乗って初めて見た。まあこんなレベルなんで、次に受験できる日は相当先(というか、そんな日が来るのか?)。でも昔懐かしい微積と線形代数が縦横無尽に使えて一つ一つがとても新鮮。楽しく勉強させてもらっています。

3級合格

確実な知識がないと時間内に回答できない構成の試験。

笠井 三千年さん(公務員)

統計に興味があり基本から勉強してみたいと思っていたので、学習をどのように進めようかとネットで検索していたところ、統計検定の存在を知り、各級に合わせて学習していこうと決めました。

基本から勉強しなかったのが4級を学習・受験して、今回の3級に続けてきたのですが、これまで一貫して認定テキストと過去問を繰り返していました。理解しにくい説明があれば、他の学習書も確認しましたが、試験対策だけならば認定テキストで充分カバーできると思います。

3級の試験は、試験の内容・出題数と実施時間が絶妙と感じました。1問2分計算ですから時間に余裕がありそうにも感じますが、本試験では考えが詰まるような問題になると焦りが出て、後の問題に時間の焦りが積もっていき、時間のプレッシャーから見直し時間があまり取れませんでした。それでも3級レベルではこの内容・出題数・実施時間で良いと思います。確実な知識がないと時間内に回答できない構成の試験になっているのではないのでしょうか。

試験後の感想は、高得点は無理でも合格できたかもしれないとの印象でしたが、思いのほか好成绩の合格で一安心でした。

今後2級も受験したいと思っていますが、私自身は統計を活用しない職場環境にいて、このままの学習方法では難しい感覚を持ったので、2級に対応できるレベルまで学習を深めるには、今までよりも時間が必要と考えています。

それでも統計への興味は増していますので、今後も学習を継続して統計リテラシーを深めたいと

思っています。

自己の統計のスキルを測る「ものさし」。

和田 剛直さん(会社員)

＜統計検定との出会い～受験の動機＞

その出会いは唐突に訪れた。

「うん、これだ!!」,そしてこれが統計検定に初めて出逢ったときの、私の感想だ。

私が統計検定のことを知ったのは、義姉の家に遊びに行った際、何気なく書棚に目を向けると、統計検定の公式テキスト、過去問題集(以降、公式テキスト等)が目に入った。

ちょうどその頃、多くのデータを扱う機会が多い業務を担務し半年、自己の統計のスキルを測る「ものさし」がないか、探している折でもあった。

自宅に帰ると、早速、「統計検定」をインターネットで検索してみた。

検索の結果、以下の3点の特徴に気づき、「統計スキルをチェックするためには、この資格しかない」、そう感じ、平成28年6月の「統計検定3級」の受験申込み手続きをしていた。

(1) 日本統計学会公式認定・総務省後援の資格であり、もっとも権威ある資格こと。

(2) 知識サイドと実務サイドの両面からの出題であり、問題のバランスが非常に良いこと。

(3) 実際のデータを基にした問題もあり、実態に即しており現実的離れしていないこと。

＜受験勉強＞

私は、まず、インターネットでダウンロードした昨年6月と11月の過去問にトライした。

結果は、どちらも6～7割程度の得点だった。

その後は、インターネットでダウンロードできる解答を見ながら、自分なりに理解を深め、この過去問に何度もトライし、試験当日を迎えた。

なお、インターネットでダウンロードできる解答には、解説等はなく正答のみの記載であるが、正答を見れば、概ね正答となるプロセスが理解できたため、公式テキスト等を使用せずに勉強したが、もし、正答となるプロセスが理解できなかった方は、是非、公式テキスト等の活用をお勧めし

たい。

<受験の感想>

緊張しながら挑んだ試験当日。

スタートは慎重になりすぎペースが遅くなってしまったが、時間一杯には何とか全問回答することができた。一定の手応えも感じていた。

数日後、ホームページ上に掲載された解答で自己採点すると、1問を除き正答。

出来すぎだ（驚きっ）！！

なお、反省になるが、受験勉強において試験時間（60分）を意識して過去問を解くことをしなかったが、時間感覚を磨く意味でも、是非、時間を計って過去問を解かれることをお勧めしたい。

<今後の受験意向>

今回は「自己の統計スキルを測る」目的で3級を受験させて頂いた訳だが、次は「自己の統計スキルアップ」を目的に、2級にチャレンジしたい。

また、現在、会社ではチームで仕事をしているが、是非、同じチームのメンバーにも、統計検定にトライするよう、働きかけていきたい。

<これだけは言いたい！>

最後になるが、「ビックデータの有効利用」や「人口知能（AI）のディープラーニング」などにも活用される統計スキルの重要性は、今後ますます増していくものと思われる。

このような情勢の中で、国家資格がないというのは、非常に残念であり、また、国際競争力の観点からも良くない状況だと感じる。

是非、この「統計検定」が「日本統計学会公式認定・総務省後援の資格」から、「国家資格」に昇格されることを、一国民として願ってやまない。

客観的な分析を身につけるための統計学。

井上 進輔さん（公務員）

私は今年の1月から、生産動態統計調査を担当することになり、そのデータを利用した地域の鉱工業生産動向の分析にも加わっています。生産の動向を把握して要因を分析するためには、新聞や雑誌等による業界の情報も踏まえながら、長期・短期での時系列グラフを適切に読み取る知識が必

要です。

統計学については学生の頃に授業がありました。が、もう十年以上前のために覚えておらず、基本となる知識について学び直す必要があると考えていました。統計検定については書店で本を探しているときに存在を知り、3級の試験が統計グラフや時系列データの読み方などデータの分析を対象としていたため、そこから学習してみようと過去問題集を購入し勉強を始めました。

データを偏りなく正確に分析していくのは、複数の人間で検討を行っても難しいものです。また、知識として分かっていることでも、仕事の中で活用していくにはスピード感をもって判断していくことが必要で、試験という形で時間内に解く練習に取り組むのは有用だと思います。

そもそも統計が必要なのは、人々の見解が分かれる時に、客観的な事実に基づいて判断を下すためだそうです。確率・統計に基づく需要予測やビックデータの収集・解析による商品開発など、新聞や雑誌のキーワードで統計を目にすることが増えているなか、客観的な分析を身につけるための統計学の勉強をお勧めします。

4級合格

事務や営業等の職種に就くことが多い文系にこそ必要な統計的な能力。

Mさん（非公開*）

私は事務員として経理とEXCELでの資料作成等を生業としております。数学は得意ではなかったので文系の学部に進みましたが、嫌いではなかったこともあり、結局、数字を扱う仕事に落ち着きました。

また、趣味と実益を兼ねて、大人の学びなおしドリルや一般向けの数学書で数学への再チャレンジを続けておりました。

学生の当時は、統計データ等を論理的に読み取り、考えるといったカリキュラムはありませんでしたし、文系に進んでしまうと、確率統計を学ぶ機会もありませんでした。

しかし、社会人になって実感したのは、事務や

営業等の職種に就くことが多い文系の者にこそ、具体的な数値データを現場から自分で拾い上げ、的確に処理・分析する能力が必要だということでした。

仕事のために簿記や情報処理の勉強をしていたのですが、データの分析や統計学など、もう一步数学的な分野に踏み込みたいと考えておりました。

「統計検定」の存在を知り、自分が学びたかった内容に近く、検定試験として結果を客観的に評

価できることもあり、受験しました。

今回、賞をいただき、続けてきた数学が、「下手の横好き」から、「好きこそものの上手なれ」に少しだけ近づけたようで、とてもうれしかったです。

まだまだ先は長いですが、これからも「統計検定」を受験し、自分なりに行けるところまで続けていこうと思います。

(*特例として、匿名で掲載させていただきます)

10. 理事会・委員会報告 (2016年7月16日開催)

一般社団法人 日本統計学会

理事会議事録

日時：2016年7月16日（土曜日）午後0時00分～午後0時30分

場所：東京理科大学神楽坂キャンパス1号館14階数理情報科学科ゼミ室

理事の総数 13名 出席理事の数 11名

監事の総数 3名 出席監事の数 2名

出席者：

理事：岩崎学会長、中野純司理事長、間野修平（庶務）、村上秀俊（庶務）、倉田博史（会誌編集欧文）、笛田薫（会誌編集和文）、青木敏（大会・企画・行事）、塚原英敦（国際）、中谷朋昭（国際）、照井伸彦（渉外）、瀬尾隆（渉外）（以上11名、カッコ内は役割分担）

監事：国友直人、田中勝人

第1議案 常設委員会における委員の交代について（資料1）

・大会委員

プログラム委員会：橋口博樹委員より寺田吉壱委員に交代（2016.10.1付け）

運営委員会：櫻井哲朗委員より川野秀一委員に交代（2016.10.1付け）

青木理事より、資料に基づき、次期大会委員会委員について説明があり、審議の結果、新委員としてプログラム委員を寺田吉壱氏、運営委員を川

野秀一氏に依頼することが承認された。

第2議案 一般社団法人データサイエンティスト協会への入会について（資料2）

中野理事長より、資料に基づき、一般社団法人データサイエンティスト協会に特別会員として入会することの説明および提案がなされ、審議の結果、一般社団法人データサイエンティスト協会へ入会申込することが承認された。

第3議案 会員の入退会（回覧）

中野理事長より、回覧資料に基づき、入退会者が紹介され、承認された。

一般社団法人 日本統計学会

委員会議事録

日時：2016年7月16日（土曜日）午後0時30分～午後2時45分

場所：東京理科大学神楽坂キャンパス1号館14階数理情報科学科ゼミ室

出席：理事11名、監事2名 計13名

岩崎学会長、中野純司理事長、間野修平、村上秀俊、倉田博史、笛田薫、青木敏、塚原英敦、中谷朋昭、照井伸彦、瀬尾隆、国友直人（監事）、田中勝人（監事）

<報告事項>

1. 欧文誌編集委員会

倉田委員長より、第46巻第1号（2016年9月発行予定）の編集作業の進捗状況が報告された。

2. 和文誌編集委員会

笛田委員長より、第46巻第1号（2016年6月発行予定）の編集作業の進捗状況が報告された。

3. 大会委員会

2016年度統計関連学会連合大会：その後の経過報告（資料3）

青木委員長より、資料に基づき2016年度統計関連学会連合大会に関する報告があった。

4. 企画・行事委員会

報告事項なし。

5. 庶務委員会

代議員選挙・会長選挙の日程（資料4）

間野委員長より、資料に基づき代議員選挙・会長選挙に関する報告があった。

6. 広報委員会

ウェブのリニューアル

森委員長の代理として、間野庶務委員長より一般社団法人日本統計学会のウェブページのリニューアルについて報告があった。

7. 国際関係委員会

塚原委員長より、資料に基づき CSA-KSS-JSS Joint International Session, Wakimoto Memorial Session (CIPS-KSS-JSS International Session for Young Scholars), 2016年度統計関連学会連合大会における国際セッションに関する報告があった。

8. 渉外委員会

照井委員長より、2011年度－2013年度に受給した科研費に関する日本学術振興会による実地検査の実施に関して報告があった。また、瀬尾委員長より、統計検定に関する報告があった。

9. その他

報告事項なし。

< 審議事項 >

1. 欧文誌編集委員会

審議事項なし。

2. 和文誌編集委員会

審議事項なし。

3. 大会委員会

審議事項なし。

4. 企画・行事委員会

審議事項なし。

5. 庶務委員会

審議事項なし。

6. 広報委員会

審議事項なし。

7. 国際関係委員会

審議事項なし。

8. 渉外委員会

審議事項なし。

9. その他

なし。

今後の予定

2016年9月4日（日）18：10 役員・代議員協議会@石川県教育会館

2016年12月17日（土）12：00 理事会・委員会@統数研八重洲サテライト

2017年1月～2月（2月18日以前）理事会・委員会

2017年3月4日（土）夕方 社員総会/被選代議員会 政策研究大学院大学周辺

11. 2016年役員・代議員協議会記録

間野 修平・村上 秀俊（日本統計学会庶務担当理事）

日時：2016年9月4日（日曜日）18：10－19：30

場所：石川県教育会館第1会議室

参加人数：33名

議題

1. 委員の交代について

2. 渉外委員会の設置について

3. 委員会の活動について

4. 連合大会中の日本統計学会関連セッションについて

5. 会長選挙、代議員選挙について

6. 欧文ジャーナルの方向性について

7. その他（質疑応答、情報提供等）

12. 修士論文・博士論文の紹介

最近の修士論文を原稿到着順に紹介いたします。

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月の順に記載いたします。(敬称略)

博士論文

● (1) 佐伯 浩之 (2) 博士(理学) (3) 千葉大学 (4) 複数の読影者による医学診断法の有効性に関する統計的推測 (Statistical Inference for the Efficacy of Diagnostic Procedure from Multiple Raters) (5) 汪 金芳 (6) 2016年9月

修士論文

● (1) Jia-Han Shih (2) 理学修士 (3) 国立中央大学(台湾) (4) Dependence measures and competing risks models under the generalized Farlie-Gumbel-Morgenstern (5) 江村剛志 (6) 2016年8月

● (1) Yu-Ting Liao (2) 理学修士 (3) 国立中央大学(台湾) (4) A review and comparison of continuity correction rules: the normal approximation to the binomial distribution (5) 江村剛志 (6) 2016年8月

13. 新刊紹介

会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を掲載します。

・富田 誠・植木 優夫著『統計学 One Point
【1】 巻 ゲノムデータ解析』, 共立出版, 2016年9月, 2,200円

内容紹介: 詳細は以下 URL 参照.

<http://www.kyoritsu-pub.co.jp/bookdetail/9784320112520>

・「一般化線形モデル」, 汪 金芳, 朝倉書店, 2016年8月, 3,600円+税

内容紹介: 標準的理論からベイズ的拡張, 応用までコンパクトに解説する入門的テキストであり, 多様な実データの R による詳しい解析例を示す実践志向の書である.

・林高樹・佐藤彰洋, 『金融市場の高頻度データ分析 —データ処理・モデリング・実証分析—』, 朝倉書店, 2016年7月, 3,700円+税

内容紹介: 「ファイナンス・ライブラリー」シリーズの第13冊目. 詳細は以下 URL 参照.

<https://www.asakura.co.jp/books/isbn/978-4-254-29543-6/>

14. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2016年度会費の請求書が会員のお手元に届いていると思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。また便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上、こちらもご活用下さい。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6

能楽書林ビル5F

公益財団法人統計情報研究開発センター内

日本統計学会担当
Tel & Fax : 03-3234-7738
E-mail : shom@jss.gr.jp

豊, 寺田吉壺, 富高辰一郎, 鳥谷部智規, 中山優
吾, 濱崎晃, 藤森洸, 本間克仁, 松尾恒, 明福幸
慶, 森山卓, WU STEPHIN (敬称略)

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表
し、御冥福をお祈り申し上げます。

田路 健一 会員
久次 智雄 会員

退会承認

綾野孝則, 梶谷十年實, 土居英二, 本郷茂
(敬称略)

入会承認

荒木健司, 石川大智, 大堀勝正, 小田凌也, 笠井
裕之, 狩野修平, 菅野雄太, 顧艶紅, 笹原妃佐子,
佐藤宇樹, 佐藤卓裕, 渋谷遼平, 高須佑哉, 寺澤

現在の会員数 (2016年7月16日)

名誉会員	16名
正会員	1,426名
学生会員	73名
総計	1,516名
賛助会員	19法人
団体会員	7団体

15. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益である
と考えられるものなどについて原稿をお送りくだ
さい。以下のような情報も歓迎いたします。

- 来日統計学者の紹介
訪問者の略歴, 滞在期間, 滞在先, 世話人など
をお知らせください。
- 博士論文・修士論文の紹介
(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4)
論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年
月 をお知らせください。
- 求人案内 (教員公募など)
- 研究集会案内
- 新刊紹介
著者名, 書名, 出版社, 税込価格, 出版年月を
お知らせください。紹介文を付ける場合は100
字程度までとし, 主観的な表現は避けてくだ
さい。
- 会員活動紹介 (叙勲・受章, 各種受賞等)
できるだけ e-mail による投稿, もしくは, 文
書ファイル (テキスト形式) の送付をお願い致
します。

原稿送付先:

〒700-0005 岡山県岡山市北区理大町1-1
岡山理科大学 総合情報学部 社会情報学科
森 裕一 宛
E-mail : koho@jss.gr.jp
(統計学会広報連絡用 e-mail アドレス)

- 統計学会ホームページ URL :
<http://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページ URL :
<http://www.jfssa.jp/>
- 統計検定ホームページ URL :
<http://www.toukei-kentei.jp/>
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス :
meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用 e-mail アドレス :
koho@jss.gr.jp
- その他連絡用 e-mail アドレス :
shom@jss.gr.jp